

令和元年度（指定1年次）

地域との協働による高等学校教育改革推進事業 ＜グローバル型＞

想・創 まほらディア プロジェクト

研究開発実施報告書



九里学園高等学校

想・創 まほらディア プロジェクト

世界に誇れる持続可能な置賜を創造する人材の育成

目的

SDGs を行動基盤としてグローバルな視点でイノベーションできる国際人を育成する

目標

地域におけるSDGs 拠点校として、この地域のSDGs 理解促進と浸透に努め、同時にグローバルな視点でこの地域におけるSDGs 達成のための活動を行うことで、この地域を持続可能で理想的な地域にイノベーションする

ハワイ海外研修
フィリピン短期留学
台湾短期留学
グローバル・サミット



GCP
Edge-Next
グローバルキャンプ
グローバル・タレント



グローバル・ラーニング
α: グローバルな社会課題
β: ローカルな社会課題



教科横断型学習



15分ゼミ

グローバル・ラーニング α: グローバルな社会課題について解決へ向けた提言を行う探究学習

貧困と格差: 絶対的貧困と相対的貧困・日本の子どもの貧困・政策提言

SDGs: 自分たちの生活とSDGs・包摂的な概念・社会の中でのSDGs・達成へのアクションプラン

難民問題: 難民を知るWS (IVY)・難民を知る(AAR)・模擬国連

食料問題: 食料需給の課題・模擬国連

グローバル・ラーニング β: ローカルな社会課題について解決へ向けた提言を行う探究学習

1年 Project Based Learning 2年 Personal Project Learning 3年 Advanced Project Learning

1年 食と健康プロジェクト

有機農業の菊池農園でのフィールドワークを行い、土づくりや農業体験、実食などを通し、その価値や効果を理解し、地域課題の解決を目指す。
高畠オーガニックラボにて成果を発表。

1年 子ども食堂プロジェクト

NPOの子ども食堂の手伝いを行いながら、生徒たち自身での子ども食堂を開設し、持続可能で地域に必要な子ども食堂の在り方を探究する。
国際ESDシンポジウムにて成果を発表

1年 多文化共生プロジェクト

グローバル・カフェを開き、留学生と対話を繰り返しながら、彼らと協働で外国人にとっても住みやすい共生社会の構築をめざす。
山形国際理解フォーラムにて成果を発表

2年 Personal Project Learning × ハワイFW

ハワイでの持続可能な社会の創造をテーマとしたフィールドワークやインタビュー調査を組み込んだ個人での課題研究

3年 Advanced Project Learning

2年次の課題研究を英語の論文にまとめる一方で、1、2年生のゼミ形式の探究学習のメンターとして助言、個人のスキルアップを図る

G
C
P

グローバル・キャンプ地球塾

山形大学の留学生とSDGsをテーマとしたワークショップに取り組んだり、異文化理解に努めたりする協働学習

英語(多言語) × SDGs × 思考・創造

グローバル・タレント塾

グローバルに活躍する国際人の講話やワークショップを行い、国際人としてのマインドセットを図る

キャリアデザイン × 志

山形大学Edge-Next

山形大学の起業家育成プログラムに参加し、イノベーションマインドを涵養し、ソーシャル・ビジネスを学ぶ

アントレプレナー × イノベーション × 世界

教科横断型学習

グローバルでの学びと教科での学びをリンク
食と健康 × 家庭 貧困 × 国語 × 英語

15分ゼミ

毎週木曜日、4～5人一組のグループで行う。担当者が新聞記事をもとにSDGsの視点からレジュメを作成し、話し合いを行う。

グローバル・サミット in 台湾

台湾の高校生と探究学習の成果発表意見交換会及びSDGsのワークショップを行う

九里学園高等学校
プログレス・コース

1～3学年

「グローバル・ラーニング」

九里学園高等学校は、大学進学希望者を対象とするプログレス・コースにおいて「グローバル・ラーニング」という探究活動を推進しています。在籍する生徒たちは、同校独自のアプローチにより、さまざまな外部団体・機関や企業、大学、NPOなどの協力を得て、実社会や地域コミュニティと密接につながる広く深い学びで成長を遂げています。

「グローバル・ラーニング」が醸成する視点・行動力。
地域理解が世界を身近にし、自分を大きく成長させる。

学校基本情報

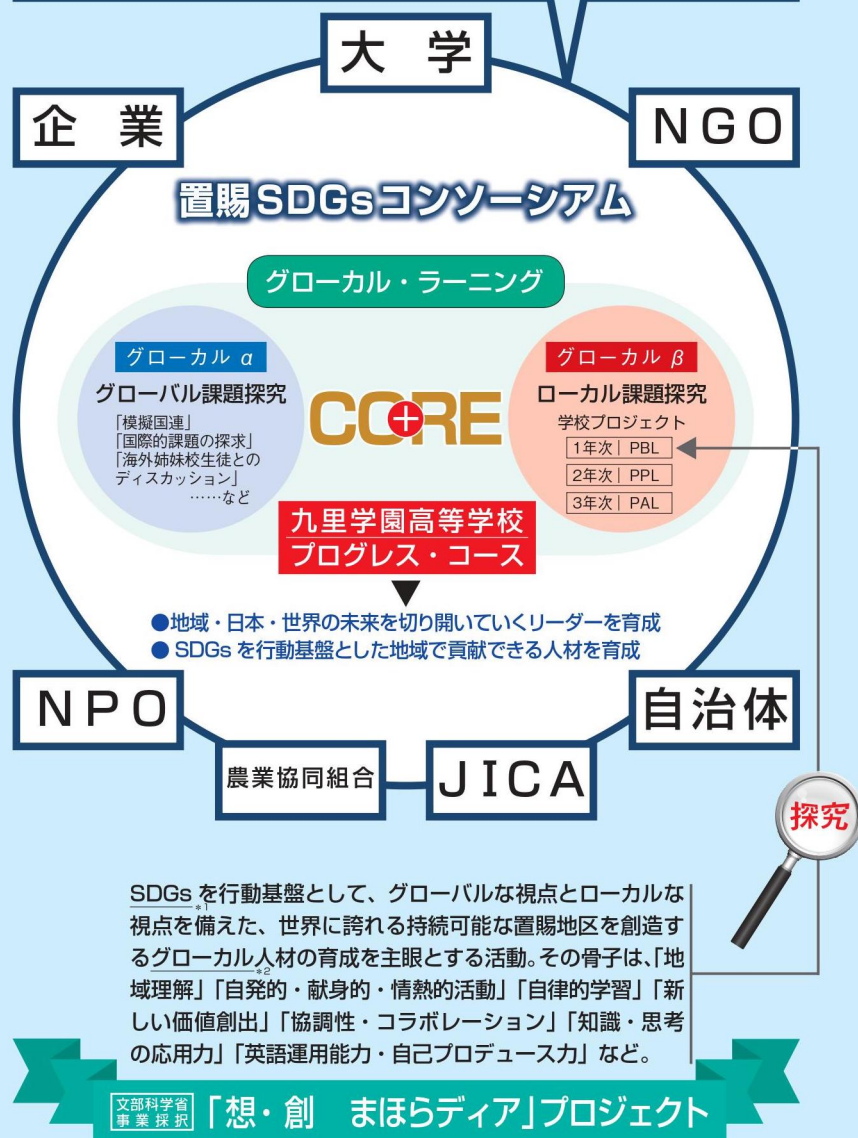
所在地 〒992-0039 山形県米沢市門東町1-1-72

URL <http://kunori-h.ed.jp/>交通 JR米坂線「南米坂」駅下車、徒歩18分。
JR「米坂」駅下車→山交バス（白布温泉行）乗車後「上杉神社前」下車、徒歩2分

校長 九里 廣志

生徒数 男子266名、女子251名

コンソーシアムで「置賜地区」で協働する団体、またタイミングによって協働する団体等。バランス良く配された「産・学・官」外部機関との多様な連携が「学び」の軸となっている



九里学園高等学校には、元来、課題研究に取り組む土壌がありますが、平成27(2015)年度に、文部科学省から「SGH(スーパーグローバルハイスクール)アソシエイト」として位置づけられた後は、より本格的な探究活動への取り組みにシフトしてきた流れがあります。探究学習を主導する鈴木 精先生は、その当初から探究学習を構築・牽引しており、さらに平成31(2019)年度からスタートした「まほらディアプロジェクト」を担当・統括。日々、精力的に生徒の指導に当たっています。

鈴木先生に、九里学園高校の探究学習についてお話をうかがいました。



鈴木 精 先生

教育内容充実課・グローバル教育主任・
地域協働推進事業研究開発推進委員長



2種のグローバル授業で体験・考察、リンクして発展

グループ活動、個人研究、英語発表。

移行する3年間の「グローバル授業」

本校の「プログレス・コース」で行うグローバル・ラーニングの授業は、「グローバル α 」(以下、 α)と「グローバル β 」(以下、 β)に分かれ、いずれもフィールドワークや体験的な学びを重視しています。全体としては週3時間を割いており、 α は週2時間で「模擬国連」や海外姉妹校生徒とのディスカッション、SDGsにおける課題探究などによりグローバルな視野を養います。

β は週1時間で地域の課題を探究しますが、学年により学び方が異なります。1年次は学校プロジェクトにグループで取り組む「PBL」(Project Based Learning)。現1年生は、本年度スタートした文部科学省の「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」の「グローバル型」として採択された「想・創 まほらディア」プロジェクトにおいて探究学習を進めています。

2年次は、生徒全員が課題を見つけて探究する個人研究「PPL」(Personal Project Learning)に取り組めます。自分で課題を見つけるのが難しい生徒もありますが、1年次の α と β でさまざまなプログラムを体験することで、できるだけスムーズに興味・関心を引き出すように配慮しています。検証段階ではありますが、様子を見てみると、ワークショップや模擬国連では問題に入り込んで、感情移入するケースが非常に多く見受けられます。現2年生は、どちらかという1年次の α で学んだ難民・移民やSDGsのテーマ、格差・貧困といった社会的な課題から、探究対象を見つける生徒が多い印象があります。2年次の最後には、その成果をまとめて発表します。

3年次の β のポイントは、成果を英語論文で発表する「PAL」(Project Advanced Learning)への取り組みです。SGH課題研究

フォーラムなど、校外発表の機会を多く設けて、他校や外部団体と接触し、さらに広い視野を身につけることを期待しています。

学年縦断型で展開するグローバル学習 3年生はリーダーシップの獲得機会に

グローバル授業の特徴の一つは、学年縦断型であることです。取り組む内容や方法は学年や個人で違っていても、一緒に空間で学ぶことで、3年生は2年生の課題研究や1年生の学校プロジェクトに対する助言なども行います。課題が学年を超えて引き継がれている場合もあり、自分たちが受けてきた指導経験をベースに、教員と同じ視点で下級生に疑問を投げかけたり、アドバイスをしたりしています。それにより3年生は、自分の研究を別の方向から見直すことが可能となり、また「リーダーシップ」という新しい資質・能力、批判的なものの見方などを獲得するトレーニングの機会にもなっています。

探究により大きくなる「学びの器」 目指す進路への目的がより明確に

グローバルの学習スタイルを導入して数年が経ちますが、その成果も見えてきています。強く感じる効果の一つは、「学びの器」が大きくなるということです。探究にしっかりと取り組んだ生徒は、受験勉強を含め、さまざまな知識をたくさん詰め込んでくても落ちることがありません。自分で器をどんどん広げていくためインプット量が多い。従って、私たち教員側の投げかけに対しても、すでに定着した多様な知識、あるいは体験などと関連づけながら、自分の中で咀嚼・吸収していきます。学びが広く深くなり、自然に学力も伸びているようです。まさに「学びの器」が大きくなり広がっていくイメージです。

探究学習による最も大きな変化は、進路先の選び方かもしれません。



例えば、ある生徒は、探究で社会課題を扱ったことで、「企業が変わらなければ、この問題解決は難しい」と考え、それなら「企業経営の在り方を学んで、企業で社会課題の解決に携わりたい」と、経営学を学べる進路を選択しました。また、地域課題に取り組もうと決めた別の生徒は、それらを学ぶために、地元の山形大学に進学したいと、将来をしっかりと見据えることができました。こだわりと目的意識を明確に持って、進路を考えるようになった端的なケースです。

「行動力」がより高まる効用も期待 タテの変化を学校全体に波及させたい

生徒たちからは、「行動力がついた」「学ぶことが楽しくなった」と聞くこともあります。部活動をするために入学したのに、探究のほうが楽しくなった生徒、1年次の学びだけでは満足できず、2年次進級を目前にした春休みに自らフィリピンに渡って、ゴミ山で暮らす子どもたちと一緒にフェアトレード製品づくりを手伝った女子生徒、難関大学のAO入試で臆することなく自分をアピールして、チャレンジしていく生徒など、頼もしい事例が相次いでいます。探究活動やグローバル学習が生徒たちの新しい可能性を引き出しているのでしょう。

模索は続きますが、今後は、この結果をさらに教科横断で実施できたら良いですね。グローバルの授業だけではなく、各教科に落とし込むことができれば、より大きな効果が期待できます。最終的には、学校全体に波及させていくのが目標の一つです。

探究

【想・創 まほらディア】プロジェクトに取り組む3年間

文部科学省が主導して令和元年度にスタートした「地域との協働による高等学校教育改革推進事業・グローバル型」に指定された「想・創 まほらディア」プロジェクト（以下、まほらディア）は、「プログレス・コース」の現1年生から3年間で取り組む探究学習です。テーマは、平成27年度からSGHアソシエイトとして積み上げてきた先輩卒業生たちの探究の成果を引き継いでいます。具体的には、「食と健康」「貧困」「多文化共生」の3つ。いずれもグローバルな事象と相関関係が深く、さらに学校周辺の地域（置賜地区）で考えるべき課題として浮き上がってきたものです。

「まほらディア」の大きな特長の一つは、九里学園高等学校が核となった上で、外部団体等と連携するコンソーシアムにおける協働ですが、各テーマはその協働関係を活用したプログラムからスタートしています。1年生の前回は、現状を認識するために全員がすべてのテーマについてフィールドワークやワークショップなどで全体像を把握。後期からは、各自の興味・関心があるテーマごとにグループに分かれて探究を進めました。

テーマ① 食と健康

フィールドワークで体感・考察

「まほらディア」プロジェクトのスタート時に行ったのは、隣接する高畠町の地域創生プロデューサーと有機農家の方から、これまで取り組んできた過程や、現在抱えている課題などの話を聞くことでした。その中で、生徒たちは実際に何が課題となっているのかを理解し、自分たちはどのような問題意識を持っているのか、どのような課題をテーマとするのかを抽出していきま

した。

“食の良さ”“有機農業の良さ”などについて文献や大学と協働研究などで検証しながら、外部の方々の協力を得てフィールドワークを行うことで、“後継者問題”や“普及”などの課題を見つけていくというように、スモール・サイクルの積み重ねにより一層傾注しました。

テーマ② 多文化共生

グローバル・カフェで課題を発見

米沢市は地域の国際化を目的に外国から国際交流員を受け入れており、その方を招いてのワークショップから探究学習は始まりました。災害時、外国人に対する情報の流し方や炊き出しなどについて考え、実際に参加した上でどのような方法がベストなのかを一緒に考えました。

それを受けて、ひと月に一回、「グローバル・カフェ」を開き、山形大学の留学生が抱えるさまざまな問題を話し合いながら、米沢で共生社会を



構築するためにはどうしたら良いのかを探ることになりました。

そこで出てきたのが、文化の違いに起因するコミュニケーション不足の問題です。留学生からは、日本人はほかの国の外国人と一緒にいる環境に慣れていないため、意思の疎通が難しいところがある。外国人にふれる機会を増やしたほうが良いとの意見が出されました。

確かに日本人は外国人に臆する人が少なくないし、英語ができないと会話が成立しないと考える傾向も否定できない。しかし、日本語が上手で十分に話ができる外国人もいることに気づくだけでも違うのではないかと、意見が挙がってきました。そうした意見交換が出发点となって、“グローバル・カフェを外国人とふれ合う場として機能させる”という発想につながりました。

また、病気の時には、外国人も困るけれど、実は受け入れ側も困ることがあるだろうと考え、市立病院などに行き、医療関係者に話を聞くフィールドワークも行いました。

テーマ③ 貧困

生徒自身による「子ども食堂」開催

今年度は「子ども食堂」についての探究です。数年前の先輩たちが行った相対的貧困と絶対的貧困の探究が「子ども食堂」に行き着きました。それを現3年生が引き継いで、子ども食堂に対する「偏見の有無」と「認知度」などを調べました。その結果、この地域では“子ども食堂に対する認知度が低い”ことが分かったのです。また“子ども食堂は効果をもたらすものの、実際には活動の継続が難しく、閉鎖を余儀なくされる場合がある”という厳しい現状があることも

*1 SDGs

2015年9月、国連サミットで採択された16年から30年までの国際社会共通の目標。持続可能な世界

を実現するための17のゴール（貧困、飢餓、教育、不平等、消費と生産など）と169のターゲットから構成されている。

*2 グローカル（Glocal）

グローバル（「地球規模の」）「世界規模の」という意味のGlobalと、ローカル（「地方の」「地域的な」と

いう意味のLocal）を組み合わせた造語で、「地球規模の視野でものごとを考えつつ、地域視点で行動する」という考え方のこと。



■文化祭で「食と健康」×「多文化共生」×「貧困」の3テーマの融合が実現！

文化祭の「子ども食堂」プレオープンでは、「まほらディア」における3つのテーマが融合し、一つのカタチになりました。

食材は、「食と健康」プロジェクトでお世話になっている農家の方が、趣旨に賛同して有機農業で栄養価が高いもの、ゲンキナや粟元米を提供してくださいました。生徒たちは、そうした素材の良さを紹介しようと工夫を凝らしました。

「多文化共生」プロジェクトからは、「地域の人たちとふれ合う機会が少ない」山形大学の留学生たちが参加。ブースを設置して、外国に関するクイズを出したり、外国のおもちゃを紹介して、参加者たちと共に楽しみました。

「まほらディア」は3年間をかけて、最終的に3つのテーマが相互に連携していくことも一つの目標でしたが、初年度から

関連性を持たせることができたように思います。それを可能にした要因には、1年次の前期に生徒全員がすべてのテーマについて学んだこと、そして知識や意識を共有した効果が大きかったのではないかと考えています。各テーマが、想像力や視点の転換により、相互につながる実感が得られたことは、生徒たちにとって大きな



◀文化祭における「告知課題」を改善。クリスマスの時期の「子ども食堂」告知のためのチラシを作成

収穫でした。

文化祭では、学校のポスターの中で、子ども食堂である「くのりKIDS 食堂」の開催を告知しました。今回はもう少し認知度を高められるような告知が課題です。今回来場した・しないに関わらず頭の片隅にイメージを残すことができないのか。そこから、クリスマスパーティの「子ども食堂」を告知する印象的なチラシ作成に結びつきました。市内の小学校および学童保育に掲出をお願いしました。

分かりました。

そこから得られた結果をテーマに、令和元年度新入学の1年生は「子ども食堂はどのようにすると持続可能で、偏見をなくして続けていけるのか」を課題として設定しました。その一環として、「この地域に必要なのはどのような食堂か」を考えるために、生徒たち自身で「子ども食堂」のオープンにチャレンジしました。

そのチャレンジは、この地域で「ゆあら 元気子ども食堂」を運営しているNPO法人の力添えがあって実現したものです。NPOのスタッフから子ども食堂に関する課題は、生徒自身で子ども食堂を運営・開催することで見えてくるはずだ。高校生にしかできない食堂ができれば、良い学びになるのではないかとのご提案があり、生徒たちも「ぜひ、やりたい！」と火が点いたのです。初めは、NPO主催の子ども食堂で必要なノウハウを学び体験を積みました。そこから文化祭でプレオープンという形で、実際に学校で「子ども食堂」を開いたのです。

子ども食堂を学校で展開するメリットは、遊ぶ場所がたくさんある

ということ。高校生のお兄さん・お姉さんとサッカーをしたり、折り紙をしたりと、一緒に遊んで楽しかった親近感を持ってもらえるように工夫をしました。「人とつながれた」と実感できることが、仮に将来、社会的弱者の立場になった時に役に立つだろうという文献からの知見を得ていたため、余裕のある人間関係をつくりたいとの想いがあったのです。

また、親近感や楽しさが口コミで認知されることで、少しずつではあっても本当に必要な人たちに浸透していくのではないのだろうかという、生徒たちの仮説の下で行われた試みでした。

地域社会との密接な交流・協働で高まる「探究」に対するモチベーションと自信

地域に実際に出かけ、フィールドワークを重ねていく流れの中で、生徒たちの意識が高まるが多くなっています。

例えば、「多文化共生」の生徒たちが、市立病院で外国人とのコミュニケーションについて尋ねると、ご対応いただいた看護師の方が「すごいことに取り組んでいるね!!」と言っ

てくださったそうです。私たちは、お忙しいところ申し訳ないと恐縮していたのですが、とても褒めてくださった。「食と健康」で訪ねた農家のおじいさん・おばあさんは、フィールドワーク後に行う考察をまとめるワークショップで、「自分たちが気づけなかったことを感じてくれて嬉しい」と感心してくれました。地域みなさんから頂戴するそうした肯定のお言葉や客観的な評価が、生徒たちのモチベーションや自信の醸成につながっていきます。「外に出る」って本当に大切なことなんです。

地域文化の伝承の面からも、得難い経験をしています。有機農業で収穫した食材を試食しようと、サロンで居場所づくりをしている主婦のみなさんが郷土料理にアレンジしてくれた時には、食材の調理方法や漬物の方法を教わりました。生徒たちは知的財産を受け取ったわけです。生徒たちの学びに貴重な付加価値を与えてくれました。地域社会が生徒を育むことに、改めて気づかされた瞬間です。探究は2年次から3年次へとまだまだ続きますが、それを支える力にもなっています。

*3 SGH（スーパーグローバルハイスクール）アソシエイト
グローバル・リーダー育成に資する教育を通して、生徒の社会課題

に対する関心と深い教養、コミュニケーション能力、問題解決力等の国際的素養を醸成し、将来、国際的に活躍できるグローバル・リー

ダーの育成を図る文部科学省主導の事業構想を広めていく高校のこと。目指すグローバル人物像を設定し、国際化を進める国内外の大

学を中心に、企業、国際機関等と連携を図り、社会的課題、ビジネス課題をテーマに横断的・総合的な学習、探究的な学習を行う。

「SGH」から「地域との協働事業」へ・・・ 世界を仲間とするグローバル教育を目指して

九里学園高等学校 校長 九里 廣志

SGHアソシエイト校として指定された2015年度から、本校ではプログレスコースを中心にして、「グローバルな社会問題を解決するには、身近な地域のことをもっと知り、グローバルとローカルとが一体化した教育が必要」と考え、『グローカル・ラーニング』の授業を行ってきていました。学びを継続し、より発展させるにはどうすれば良いのか考えていたところに、文科省の新事業として『地域との協働による高校改革事業』の募集が発表されたのでした。SGHの指定はあと一年残っていましたが、「グローカル型」の事業内容が目標とするところと一致していることから申し込み、幸いにも指定校として採用されて、今行っている新たな展開が可能になったのでした。

「地域の多様な団体と協働することで、学校という枠の中では成し得なかった地域課題についても実践的に取り組むことができるのではないかと期待が生まれた。教科を横断する新しい教育も可能になり、Society5.0社会を生き抜き切り開いていく人材育成ができるだろうとの心積もりや、外部人材の存在が生徒の新しい知識や価値の獲得やキャリア形成に大きな影響を与えると確信していたし、同時にこの地域への教育的効果も大きいのではないかと考えた。」と担当者は述べています。

「グローバルな視点と新しい価値観で発想し活動できる国際人を育成する」目的と、「この地域のSDGs理解促進と浸透に努め、地域を持続可能で理想的な地域に変化させる」という目標で協働学習・探究学習を行ってきました。初年度であった今年度は、特に一年時のグローカル・ラーニングに力を置き、「食と健康」「子ども食堂」「多文化共生」の三つのプロジェクトを軸としたコンソーシアムでのカリキュラム作りを行い、地域の多くの方々からのご支援を得て活動を行ってきました。前記の三つのプロジェクトは、それまで生徒が取り組んだ「課題研究」の中から、特に生徒の興味関心が高く、学校として取り組むことで地域への波及効果が高いと考えたものです。

専門的な取り組みをじかに体験させていただいたことや、地域の多くの方々から様々な支援をいただいたことで、生徒たちは学びの目を大きく見開かせていただいたのではないかと思います。外部での、中には英語でのプレゼンテーションも、生徒たちには大変だったでしょうが、チャレンジする大変さと共に、やり遂げる満足感を実感したのではないのでしょうか。

この事業推進のためには、多くの方々から本当の多くのご支援をいただきました。運営指導委員の方々には、お忙しい中、様々なご助言をいただき、本当にありがとうございました。高校レベルではなかなか知ることの無いレベルでの重要なポイントで、教師も生徒も指導していただきました。感謝しております。

今は、突然世界を恐怖に陥れた新型コロナウイルスの蔓延で、年度のまとめや、新年度のスタートも、十分に行えずにいるところです。2月に台湾の高雄で行う予定だった「グローバル・サミット」も残念ながら実施直前で中止せざるを得ませんでした。でも準備の中で苦労した様々なことが、次年度のための頑丈なステップになってくれていると確信しております。新しいメンバーを加えて、今まで以上のレベルに達する努力と、新しいチャレンジをして行きたいと思っています。

皆様方からの益々の叱咤激励をいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

グローバル・ラーニングの実施

(1) グローバル・ラーニングについて

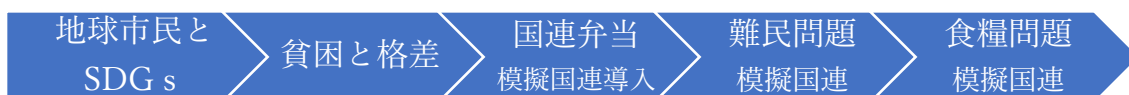
学校設定科目「グローバル・ラーニング」(1単位)に加え、本校独自の「特設時間」をグローバル・ラーニング実施の時間と設定し、それぞれグローバル α ・ β として実施した。グローバル α は1年から3年まで合同縦割りで展開し、グローバル β は学年ごとにそれぞれ1年はグローバル基礎(Project Based Learning)、2年はグローバル演習(Personal Project Learning)、3年はグローバル発展(Project Advanced Learning)を行う。グローバル α はグローバルな社会課題について解決へ向けた提言を行う探究学習であり、グローバル β はローカルな社会課題をテーマとした学校プロジェクトや課題研究に取り組む探究学習である。グローバルな視点での探究学習(グローバル α)とローカルな視点での探究学習(グローバル β)を同時並行的に学習することで、3年間を通して、国際的視点と地域的視点の間に同時双方向的な作用が発生し、2つの視点の間を行き来しながら探究的な学びが螺旋構造的に高次に深められていく効果が期待できる。

(2) グローバル α 実施報告

開発教育をベースとして、課題解決型学習に取り組んでいくこのグローバル・ラーニングは国際人に不可欠な資質・能力を育成する本校の教育活動の根幹をなすプログラムである。SGH アソシエイト時から東北公益文科大学の先生方からご指導をいただきながらシラバスを作成してきたが、毎年PDCAをしっかりと回し、生徒の実情も勘案し、学習内容を体系化し学習計画を構築している。

今年度の単元として以下の5つを行った。

- 1) 地球市民とSDGs
- 2) 貧困と格差
- 3) 国連弁当
- 4) 難民問題
- 5) 食糧問題



1) 地球市民とSDGs

導入として、生徒たちが抵抗なく、むしろ楽しみながら課題について概況を知ることができるように、「もし世界が100人の村だったら」「新・貿易ゲーム」「世界一大きな授業」などの既存の教材をベースに、担当者の青年海外協力隊としての経験を入れながら展開した。

また、SDGs が包括的かつ統合的、融合的であることを理解し、かつ、自分たちの生活や行動との関連性を学ぶ「SDGs と私たち」「SDGs ランキング」の二つのワークショップを開発して学習を行った。上級生は今までの探究学習の知見や問題意識をもとに SDGs や地球的課題をとらえ直し、1 年生は疑似体験を通してリアルに地球的課題や SDGs と私たちの生活について理解を深めた。

2) 貧困と格差

貧困と格差では世界の絶対的貧困についての状況を、アフリカを中心に学習し、その上で日本の相対的貧困について取り扱った。やはり青年海外協力隊の経験や活動を取り入れ、生徒たちが貧困をリアルに感じられるよう工夫した。また、グローバルな視点を養うために、ここでは日本の貧困に苦しむ子ども達の現状を知るためのジグソー法教材とシミュレーション教材を作成し、理解を深め、その上で海外の貧困対策・政策を調べさせながら、最終的には日本の貧困対策について政策提言をまとめ、発表した。また、この政策提言はその後行う模擬国連での政策考案の練習という全体の中での位置づけで行った。

3) 国連弁当（模擬国連導入）

本校では社会課題を多角的にとらえ、思考力や創造力、調整力等の技能を身につけさせるために、模擬国連に取り組んでいる。昨年度までは 1 年生であっても食糧問題などについて本格的に模擬国連に参加させていたが、彼らからの「いきなり本格的な模擬国連は負担感ばかりが大きく、抵抗感が増すので、簡単なものからなれていけるよう配慮があるべきだ」とのフィードバックにより、今年度は模擬国連へのハードルを下げ、興味・関心を高め、段階的に模擬国連に取り組んでいけるよう、初歩的な国連弁当を行った。これによって、1 年生は楽しみながら参加することができ、同時に模擬国連そのものはおろか、食糧問題をはじめとする諸課題についての興味も深まった。

また、議長も 3 年生にさせるなど、生徒のより主体的な態度を引き出しつつ、パーソナルスキルの向上を図った。

4) 難民問題（模擬国連）

本校では多文化共生社会の構築を目指す学校プロジェクトを行っているため、移民と関わりがある難民問題を取り上げることでグローバル課題とローカル課題をリンクさせた。また、難民問題を自分事としてとらえ、かつ、単なる人道主義的な立場から議論するのではなく、多様な立場から議論すべく指導計画を作成した。具体的にはフォトランゲージや動画を取り入れた難民を理解するワークショップを行い、その上で実際に難民支援を行っている NPO 法人 IVY から「難民を知るためのワークショップ」を行っていただき、さらに、同じく NPO 法人難民を助ける会からの講演を行い、難民理解に努めた。そして、受入側の政治的・経済的・環境的・社会的・文化的安全保障の面から問題を整理し、支援における予算的な問題等について盛り込んだ教材を作成したことで、生徒たちは、多面的に問題をとらえ、より緻密で具体的な政策考案につながった。

模擬国連当日は公開授業とし、運営指導委員である拓殖大学国際学部長の甲斐信好先生に

も参観いただき、講評をいただいた。また、次の食糧問題において、合同模擬国連を行う新庄東高校の担当教員にも参観してもらい、イメージの共有と打ち合わせを行った。

5) 食糧問題：合同模擬国連⇒本校研究報告会公開授業

高畠町で有機農業の価値を探究していく「食と健康」プロジェクトを行っていること、このグローバルαで学習している貧困や難民問題にも関係が深いことから食糧問題を単元として扱い、やはり生徒に多様な技能を習得させるために模擬国連を行った。ただし、より難易度を上げ、より積極的な参加の態度を促し、緻密な情報収集と交渉が求められるように基本的にはアウトオブアジェンダをなくし、連携協定校である新庄東高校との合同で模擬国連を行った。論点を整理するために需要と供給の両面での課題についてまとめる教材を作成し、新庄東高校と共有することで生徒たちの学習へのベクトルを合わせた。議長を卒業生と山形大学大学院の学生にお願いし、メンターとして助言にあたってもらいながら模擬国連についてもファシリテートしてもらった。より身近に感じられる大学生や大学院生からの視点は生徒にとって新鮮な学びとなった。さらに議長に3年生の代表を加えることで、教員が前に出ることなく、生徒・大学生（卒業生）・大学院生というこれまでとは違った主体者で開催することができた。卒業生と大学院生には生徒が事前に提出した担当国調査シートやポジションペーパーなどをメール等を利用して共有し、資料として助言や会議の進行に役立ててもらった。

(3) グローカルα 成果

年間を通して関連性のあるテーマを単元として選択したことから、学習の進捗に従って、それらのテーマとそのときに学習しているテーマとを関連させながら学習することができた。また、学校プロジェクトと関連のあるテーマであるため、グローバルな課題を学習しながら、この地域ではどうだろうか、あるいは、学校プロジェクトで学習していることはグローバルな文脈の中でどのように位置づけられるだろうか、あるいはグローバルな課題との関連の中で、この地域はどうだろうか、グローバルとローカルの視点を行ったり来たりしながらそれぞれをリンクさせることができた。また、複合学年での取り組みであったことから、3年生はリーダーとしての資質が身につく、下級生は2年後のモデルを見て、目標を定められるなどの利点があった。

(4) グローカルβ 実施報告

グローバルβでは、1年次でPBLを行っている。実際には「食と健康」「多文化共生」「子ども食堂」の3つのプロジェクトを展開した。2年次ではPPLとして、個人での課題研究に取り組み、3年次では2年次の課題研究を英語の論文にまとめるPALを行っている。次頁以後、それぞれの実施報告をまとめている。

食と健康プロジェクト

1 本プロジェクトの目的と目標

1. 1 目的

「有機農業の聖地・高島町有機農家から学ぶ「食と健康」のプロジェクト

地域の未来を担う一員としての自覚を涵養するとともに、地域を活性化し、地域課題を解決する主体者としてフィールドワークなどを通して地域の価値と課題を発見し、解決へ向けて行動できる人材の育成を目的とする。

1. 2 目標

心身が元気になる本物の食を活用し、地域社会の問題を解決することを目指し、食と健康を伝えるリーダー人材として実践する。今年度は、高島町地域活力創生プロデューサーの外菌明博氏の指導のもと、和法薬膳研究所の菊地良一氏の理念を正しく理解、共有し、フィールドワークなどを通してその価値を体感し、地域に発信する。

2 本年度プログラム活動内容

2. 1 プロジェクト講師紹介（菊池良一氏 高島町地域活力創生プロデューサー：外菌明博氏）

講話「なぜ今の時代に食と健康を学ぶことが重要なのか」

本プロジェクトのスタートとして、講師の紹介と講話を行った。日本の健康や教育問題、食・日本食の可能性などについて講話を受けた。その他、菊池さんより「薬元米」と味噌の試食を行った。

2. 2 第1回フィールドワーク

5月16日（木）に菊池農園にて、健康な土づくりと農業体験をするフィールドワークを行った。有機農法における土づくりの大切さやその効果、土壌と腸内細菌やそれらと健康の関わりについてお話をきき、良い土から育つ農作物を食べることで健康な体が作られることを学んだ。畑では、ミネラルや細菌を多く含んだ上質で柔らかな土と、農薬によって痩せて堅くなってしまった土を見て触れて体感した。さらに実際に自分たちでも、豆を巻いて農作業体験を行った。

実際に菊池さんの腸内細菌と同じ状況を作り出している良質の土を触ると生徒たちは一様に驚きの声を上げ、その温かさや匂い、柔らかさを感じ、それだけでも良質の栄養価の高い作物が採れることを実感した。また、このような土の貴重さについて身をもって感じる事が出来た。

その後、高島町糠野目にある和楽茶の間に移動し、スタッフの方が作った菊池農園のお米や野菜を使った、地元の伝統的な家庭料理を試食した。試食の際に、素材の説明と家庭料理の作り方について説明を受けた。だれもが笑顔で完食し、顔が見える食事の良さを実感した。試食後、グループに分かれて、畑での体験や試食の感想をもとに、有機農業の良さと課題、また、試食を通じた伝統的な食事の良さについて話し合い、グループごとに発表・共有した。生徒自身も今回のフィールドワークでは健康な体と健康な食、そして土の関係性を詳しく学ぶことが出来た。何よりこの体験が食や農、自然への関心、そして学びの意欲を高めた。

後日、学校において、フィールドワークで抽出した課題を分析し、改めて課題を設定し、解決のための方策を考えた。

2. 4 第2回フィールドワーク

7月11日（木）にゲンキナの収穫と一汁一菜試食をするフィールドワークを行った。

前回のフィールドワークに引き続き和法薬膳研究所の菊地良一氏の指導のもと、高ミネラル野菜のゲンキナについて学習し、収穫した。その後、和楽茶の間にて、地元の野菜を使った昼食を提供して頂き、生徒自身が収穫したゲンキナを頂く際に、ゲンキナの歴史や栄養について説明して頂いた。実際に食べてみて、そのえぐみなど強烈な味に驚きながらも、かえってそのために栄養価の高さを実感することが出来た。また、菊池さんから、良質の野菜は本来、野菜が本質的に持っている強い味があるとお聞きし、野菜に対する見方が変わった。今回ゲンキナを食べてから花粉症が治ったという事例なども報告され、アレルギーと食生活を見直し、まさに食と健康の関連性について新たな知見を得ることが出来た。食事終了後には、生徒による振り返りと意見交換のプレゼンテーションを作成し、地元の方々と協働して、どのような取り組みができるかについて話し合いを深めた。



2. 5 アクションプランの実践

九里祭でのアスリート食の販売を通して、「薬元米」を知ってもらう

8月31日(土)本校の文化祭を利用し、薬元米の普及を図った。実際には、生徒たちが自分たちで考えたアクションプランを実践するために、菊池農園で作られている米で作ったおにぎりを販売した。「超アスリート食」として、菊池農園で作られた「薬元米」にミネラルが豊富に含まれていることや、その米を食べることで得られる効果などを説明しながら販売し、有機農法の価値を多くの人に知ってもらうことを目的として活動した。同時に実践した子ども食堂で提供した薬元米を使った炊き込みご飯をおにぎりにし、約200食を販売した。食べた人からは、「玄米は思ったよりも食べやすい」という感想が多く、また、校内での売り上げの他、一般の来場者や中学生にも食べてもらうことができた。このことから、生徒たちは自分たちの活動が実際に有機農法の普及につながるという実感を得た。しかし、同時に実践するための負担感も多く、継続可能ではないため、課題も感じた。

2. 6 有機農業作物と健康について講話

「高畠町有機農業作物と健康の関わり」講話

9月17日(月)には、米沢栄養大学健康栄養学部健康栄養学科教授の加藤守匡先生をお呼びして、有機農業作物の栄養価と健康の関わりについて授業をしていただいた。またその栄養と運動の関係性についても研究データをもとに説明をいただき、質疑応答を行った。

2. 7 第3回フィールドワーク

9月26日(木)に、玄米麹味噌作り、玄米食一汁一菜の調理と試食のちーどワークを行った。

3グループに分かれ、和楽茶の間のスタッフの皆さんや社会福祉協議会の職員の方の指導で、菊地良一氏が生産された有機栽培の大豆を使って玄米麹味噌づくりを行った。作った味噌はビニール袋に入れて各自自宅に持ち帰った。自宅に持ち帰った後は、発酵の段階で色が変わっていくことなどを含め観察し、約10か月ねかせることによって食べられるようになる。

味噌づくり終了後、高ミネラルな玄米と有機栽培の野菜を使用して、味噌汁を作った。味噌汁に使うだしは、昔ながらの方法で昆布、煮干し、干しいたけを使い、煮干しのはらわたの部分を取り出す方法も、見せてもらいながら生徒が体験する。だしに使う乾物はそのまま味噌汁の具として取り出さない。野菜は、じゃがいも、たまねぎ、にんじん、インゲン豆、セロリは葉まで使い味噌汁に入れる。添加物を一切使わない、様々な食感を楽しめる味噌汁が完成した。おにぎりは、5分づき玄米に深炒り玄米を加えたものを炊いて、各自おにぎりを握って味噌汁と一緒に全員で頂いた。

一つの碗に、たくさんの彩り、食感、匂い、味覚が入っており、生徒たちはまさに自然の恵みをいただくことができた。そして、自分たちと自然との関係性を体験的に学ぶことが出来た。さらには菊地さんや

和楽茶の間のスタッフたちは知恵の宝庫、生きる知的財産で、このような体験学習の中で、こういう先代から生きた知恵を教わることは知識の伝播、もっと言うと文化の継承という点で非常に意義深いと考えられる。

食事終了後は、3回にわたって行われた食と健康のフィールドワークを通しての生徒が感じた事、考えたことをまとめるワークショップを行った。



2. 8 たかはたオーガニックラボでの研究発表

11月2日（土）に高畠町よねおりかんこうセンターで行われたオーガニックラボというイベントに参加し、これまでの成果を発表し、同時に有機農業の価値を発信した。

本校生徒は、「次世代に受け継ぐべき価値観・食と健康プロジェクト」と題してプレゼンテーションを行った。SDG sを意識した持続可能な置賜地域での人材育成を目的としてこのプロジェクトを進めている点や、実際の畑での収穫体験や土についての講話、味噌づくりと味噌汁の調理、糠野目地区の空き家を活用した「和楽茶の間」での地元食材でつくられた郷土料理の試食など、体験を通して感じた食と健康の価値、学び感じたことを伝えたいという目的をもって活動をしている点を中心に発表した。さらには担当教員がこのラボにおいて、本プロジェクトの教育的効果等についてプレゼンテーションを行い、地域との協働によって成しえる教育の可能性と、食農教育の価値について発信し、また、パネルディスカッションのパネラーとして加藤教授、有機農家らと参加した。

※たかはたオーガニックラボは、高畠町の有機農業についてさらに広く認知してもらうためのイベントである。1973年から始まった高畠町の有機農業に従事する若手有機農家を中心に、今年度から立ち上げた実行委員会が主催している。「体が元気になる食」を目指して安心、安全な食べ物づくりに寄与し広めていくためオーガニックラボが開催され、初回の企画として、以下のようなプログラムが行われた。



2. 9 付属幼稚園や地元大学での調査

12月27日(金)にはこれまでの研究内容を踏まえて、地域では食についてどのような取り組みをおこなっているのか、付属の幼稚園で調査を行った。地元の畑で作られている食材を使用したおかず給食を採用することで、バランスの取れた栄養価の高いものを幼児に食べさせることができるということや、園内に調理スペースを充実させ、指導内容に成長段階に合わせた食の教育が取り入れられていることがわかった。園の敷地内には畑もあり、子どもたち自身が育てたものを収穫・調理しみんなで食べることで、幼少期より食へ関心を高め、食を通して豊かな人間性を育むことを目的としていることがわかった。また、地元にある山形県立米沢栄養大学での学生の研究と実験内容についても大学の研究室を訪れ、聞くことができた。1月に菊池農園で作られた「薬元米」を使用したオリジナルメニューを1週間食べることで血液の成分がどのように変化するかを実験する内容について説明を受け、質疑応答などを行った。



3 成果と課題

生徒たちが外菌さんや菊池さんの指導のもと、フィールドワークを通し、地域の食の課題について考えることができた。また、その課題と解決方法について、九里祭での販売、たかはたオーガニックラボでの発表を通し、発信することができた。さらにその様子を地元の新聞に掲載していただいたことで、その認知は高まったと言える。生徒も菊池さんをはじめ、和楽茶の間のスタッフの方々との交流をとおして、地元の魅力や価値を体感し、食の大切さとそれを継続可能なものにしていかなければならないという活動の意義を自覚できた。目標としていた、地域の食の課題について考え、地域に発信できたことは成果として挙げられる。また、高畠町の、この教育活動への関心が高まり、町としてもよりいっそう協働してこの教育活動を添加し、地域創生につなげようとの気運が高まった。

一方で、有機農業の普及や後継者問題などを解決するにあたり、その価値の裏付けが弱く、今後の課題となった。

子ども食堂プロジェクト

1 本プロジェクトの目的と目標

1. 1 目的

地域の未来を担う一員としての自覚を涵養するとともに、地域を活性化し、地域課題を解決する主体者としてフィールドワークなどを通して地域の価値と課題を発見し、解決へ向けて行動できる人材育成を目的とする。

まずは子ども食堂をオープンし、数回開催することを目標とすることで、子ども食堂についての意義や運営のためのプロセスを知り、本格的な九里子ども食堂開設のためのノウハウを得る。また、どのような人々、企業を支援者として巻き込むと有効なのか、体験的に知り、今後の持続可能な子ども食堂について一考する。

1. 2 今年度の目標

自分たちで具体的な子ども食堂（以後くのりキッズ食堂）の意義や目的、内容を考え、実質的な運営方法を周囲の協力や指導のもとに考案し、月に一度のオープンすることを今年度の目標とした。

また、米沢市の人々、特に社会的弱者となっている家庭へ発信し、認知してもらうと同時に、広報活動の方法について良案を得る。

2 本プロジェクトのリサーチクエスト

- ① 子ども食堂の意義は何なのか？（先行文献などから調べて分かることを脱却し、自分たちでその目的を考え、運営をしてみた体験やアンケート調査などから考察）
- ② 持続可能な子ども食堂の運営にはどのような手法が有効なのか（方法論の模索）

3 本年度プログラム活動内容

3. 1 スタートアップ講話（NPO 法人ゆあら女性支援ネットワーク代表の竹部氏による講話）

5月30日（木）に子ども食堂を地域で実際に実施している NPO 法人「ゆあら」の代表である竹部氏を招いて講話を行った。竹部さんは米沢市で DV 被害者支援や DV 被害の環境で育った親子のコミュニケーション、刑務所出所者の社会復帰のお手伝い、子育て支援など、女性支援の活動家であり、この地域でも定期的に子ども食堂を実施している。アイスブレイキングから始まり、貧困問題を解決するためになにをするべきなのかという行動計画書をグループで考えた。貧困を解決するための一つの手法として、子ども食堂に着目し、「誰を協力者としてお願いするのか」・「誰が主体者となるのか」・「誰をターゲットとするのか」など竹部氏のアドバイスのもと生徒たちは熱い議論を交わした。その後竹部さんより、「幸せはお金ではない。お金はなにかを得るための道具であって、お金を得るのが目的ではない。幸せとは心の豊かさなんだと思う。」と、支援の中で実際に会った子供たちを例に挙げながら、生徒たちに語り掛けた。くのりキッズ食堂の目的を生徒達が主体的に感じながら、目標設定を行った。

3. 2 くのりキッズ食堂プレオープン

子ども食堂運営上の課題発見・運営方法の体験的学習及び、連携体制の強化を目的とする。また地域の子ども食堂に対する認知度を高めるため、各報道機関にも働きかけながら行う。また食事提供だけでなく、来店した子どもたちと一緒に遊びなどを通してコミュニケーションをとることで、今後定期的開催予定の子ども食堂へ再度足を運んでもらえることを目標に行った。学校全体の本事業や子ども食堂への理解促進と地域への波及効果を図り、本校の文化祭で九里キッズ食堂を開催することとした。

食材費用として、8月23日（金）に、米沢駅や伝国の森にて生徒主体で募金活動を行い、11,119円を集めた。子ども食堂自体の認知度が高く、多くの人に励ましと応援の声を頂戴したようだった。

8月31日（土）に11時から開催した。少しでも栄養価の高いものを提供したいという思いと、高畠町での「食と健康」プロジェクトで取り組んでいる菊地農園の有機食材の普及を図りたいというねらいから、食堂のメニューは高畠で有機農業を行っている菊池良一氏から高ミネラル米の薬元米及びゲンキ菜を購入した。炊き込みご飯とゲンキ菜のおひたし、そしておから入り肉団子を提供した。50食を準備し、提供したところ2時間弱で完売した。来場者内訳は大人27名、子ども23名であった。予想を上回る来場者で、予定よりも1時間以上も早く完売した。また来場者の大人からは『薬元米ってどんな米？』や『炊

き込みご飯や肉団子のメニューを教えてほしい』など、提供料理についても好評を得た。次回子ども食堂の告知もスムーズに行うことができたため、次回につながる開催であった。資金調達から調理、提供、告知まで生徒が行ったため、達成感及び自己有能感の高まりを実感できた。



3. 3 NPO 法人ゆあら実施の子ども食堂へのフィールドワーク

9月21日（土）に竹部氏が実施しているゆあら元気子ども食堂へのフィールドワークを行った。くのりキッズ食堂開催の実現に向けて、ゆあら主催のパン作り教室に参加することで、開催の手伝いをし、運営の経験値を得ることができた。プレオープンで行った九里キッズ食堂での取り組みとの違いを体験し、今後のキッズ食堂の方向性を考える機会となった。また生徒たちが子どもたちを関わりながら、触れ合う楽しさを実感し、次回への動機づけを高めることができた。



3. 4 NPO 法人ゆあら実施の子ども食堂へのフィールドワーク 第2回

10月8日（土）に第2回フィールドワークを行った。本格的なくのりキッズ食堂の実現に向けて、ゆあら主催の子ども元気食堂をお手伝いしながら参加することで、どのように実施しているのか実際に見て体験し、必要なスキルを学んでいくことを目標とした。

事前申し込みをしている参加者がいなかったが、飛び込みの参加者が2組あった。うどんなどほとんどの料理が出来上がったところで、小学生2名を連れたお母さんと、1歳と2歳のお子さんを連れたお母さんの参加があり、参加者の子供たちもうどん生地を型抜きなどを体験した。調理・配膳、後片付けも生徒自身が考えて次々と行いスムーズな運営に貢献することができた。

また開催と同時に地元誌の「あづまーる」の取材でゆあらの特集記事として本校生徒にインタビューや写真撮影が行われ、掲載された。この記事の反響が大きく、くのりキッズ食堂が広く認知されたようである。



3. 5 くのりキッズ食堂本実施

12月21日（土）に本校を会場にくのりキッズ食堂を初開催した。

2か所の学童から土曜保育の児童たちがまとめて参加したことで、直前の集計で、想定を超える参加者数となった。そのため、予定していたメニューを変更するなどの工夫をして対応し、ゆあらの竹部氏も、参加者増に対応して、寄付による食材を追加してくださった。先述のように地元誌に掲載されたことや、事前にチラシを作成・配布した成果もあり、来場者は合計74名に上った。受付もスムーズに行うことができ、臨機応変な対応で参加者が楽しめる環境作りを行うことができた。提供メニューはチキンライス・照り焼きチキン・サラダ・コンソメスープ・ホットケーキ（ホイップクリームとフルーツ）であった。

食後は参加者とともにスポーツやゲームなどを行い、親睦を深めることができた。



4 成果・課題

今年度目標であった、くのりキッズ食堂を開催できたことは成果であった。また地元誌に掲載されたことや、新聞に取り上げられたことなどもあり、地域への発信も同時に行うことができた。生徒達にとって、地域を巻き込んだイベントの企画や運営が、大きな挑戦であったが、同時に大きな達成感を与えるものでもあった。

運営資金や食材の調達方法や運営方法などより持続可能な運営にはなにが必要なのか、そしてどのように実現させていくかが課題として挙げられる。

学校プロジェクト 多文化共生プロジェクト

1 本プロジェクトの目的と目標

1. 1 目的

地域の未来を担う一員としての自覚を涵養するとともに、地域を活性化し、地域課題を解決する主体者として外国人居住者との対話を通して外国人の声を聴き、彼らが抱える本当の課題を知り、彼らと協働で新しい共生社会の在り方を考える。

1. 2 目標

外国人居住者とともに、地域の課題解決を目指した活動を行う。また、その活動を通して、外国人居住者が真に地域社会を構成する一員として市民参加できるような社会を創成する。

2 本年度プログラム活動内容

2. 1 第1回グローバル・カフェ

6月に本校にて、米沢市や置賜地域での多文化共生について考えるため、米沢市国際交流協会の国際交流員でイギリス出身のカニング・マーカス氏をお招きして、米沢市における多文化共生の現状についてお話し頂いた。

カニング氏を中心に、台湾、モロッコ、マレーシア出身の山形大学の留学生5名も参加して、出身国や文化の違う住民が、米沢市や置賜地域で暮らす際に起こる困りごとや、お互いの違いを尊重して、より良い町づくりに生かしていくアイデアについて考えた。

日常の問題だけでなく、災害時の伝達方法についてどのような手段をとればうまく伝えられるかなど、グループごと話し合い、発表・共有した。生徒は、初めて外国人目線での課題に気付くことができ、自分たちにもすぐに取り組める身近な方法を考えることができた。



2. 2 第2回グローバルカフェ

7月に本校にて、第2回のグローバルカフェを行った。台湾やモロッコ出身の山形大学の留学生に参加してもらい、地域での生活のしにくさや希望についてグループごと話し合った。また、地域の方々にもっと外国の文化を知ってもらいたいと考え、九里祭で何ができるのかを留学生とともに話し合った。生徒たちは、自分たちの目線だけではなく、文化も習慣も違う外国人がこの地域で生活する上での課題に向き合い、また彼らとともに生活することがともに理解しあい、助け合うことであるということが重要であると考えた。九里祭に、向けて8月末までに、来場者に向けてそれぞれの国の文化を紹介したり、ゲームを行ったりするための準備をした。



2. 3 第3回グローバルカフェ（九里祭での活動）

2回のグローバルカフェを通して、地域にも外国人居住者が多くいることをそれぞれの国の文化を知ってもらうことで認知してもらう活動が必要であると考え、九里祭で異文化紹介のコーナーを設置した。山形大学の留学生や置賜地域在住のALT 数名が、事前準備や当日参加をしてくれた。同時に開催した、食と健康プロジェクトのアスリート食販売や、子ども食堂とのスタンプラリーを計画し、ゲームなどを通して、生徒や来場者と交流を行うことができた。

2. 4 第4回グローバルカフェ

米沢市国際交流員のタイラーさんをお招きして、米沢市の抱える外国人居住者の課題について、質疑応答やグループごとの話し合いを行った。この中で、ごみ捨てのトラブルや飲食店でのメニュー表記の問題について考えた。生徒たちは、外国人向けの説明のほとんどは英語であることを知り（続いて中国語、韓国語）、少数ではあるが、その他の言語を母国語とする外国人には目を向けられていないことを感じた。たとえ少数であっても、災害時や事故、病気の際には、迅速で安全な対応が求められる。共生社会を考える上で、自分たちができることや公的機関での取り組みの不足を実感し、どのような解決策があるのかを考えた。



この回を受けて、生徒たちが再度話し合い、今年度クラスで交流したアメリカからの短期留学生（1週間程度の短期留学を受け入れ）の経験談の中から、彼女が通院の際に困難を抱えていたことを思い出し、一方で、外国人を受け入れる側にも困り感があるのではないかと仮説のもと、市内の病院での外国人への対応について調査することとした。

2. 5 調査①

米沢市立病院での取り組みについて、直接病院スタッフへの聞き取り調査を行った。対応してくださった病院スタッフの方から、外国人の年間受診者数やその際の対応などについて伺うことができた。相対的な人数は少ないものの、通訳や受診後の支払いの問題が多いことを知った。特に通訳は常駐しておらず、英語のできるスタッフに頼ることになることや、未払いのまま帰国してしまうことなどが問題であり、その解決がシステム化されておらず、現場の対応に任されていることに課題を感じた。通訳の問題については、現場の声をもとに多言語対応の機器を導入したという例も知った。



2. 6 調査②

本校に在籍している中国人生徒3名にインタビューを行った。同年代の高校生が、この地域に住んでどのように感じているのか、意識調査を行った。最も大きな問題は、やはり言語の問題。十分に話せない状態で来日し住んでいるため、意志の疎通が難しく、授業だけでなく普段の生活の中でのコミュニケーションも取りにくく大きなストレスを感じているということがわかった。また、このインタビューを通して、学校生活を送るうえでの環境や周りの対応も改善の必要性を実感することができた。

2. 6 研究発表

12月に公益財団法人山形県国際交流協会主催の国際理解実践フォーラムにて、ポスターセッションを行った。調査を通して、米沢市が多文化共生推進を目指す上で、整備がまだ不十分であることがわかり、特に医療面や心の健康面において、言語だけでなく価値観や考え方の違いから外国人居住者が、共生しやすい街にする必要性について発表した。また、生徒たちはこの発表を通して、多くの意見を得ることができ、異文化理解に興味や関心のない人をどのようにして巻き込むかをより具体的に考えることが大切であると感じた。

3. 成果と課題

山形大学工学部に在籍している留学生との交流を通して、生徒たちが異文化理解の大切さを身近に感じ、多文化共生とは何なのか、自分たちが住む米沢市が多文化共生社会になるためにはどうしたらよいのかを、主体的に考えることができた。市の国際交流員や本校に在籍している外国人生徒に直接話を聞いたり、市立病院で調査をしたりしたことで、実際にどんな取り組みが現場で行われており、それが外国人居住者にとって本当に有益なのかを考えることができた。

一方、調査において、十分なデータがとれなかったことや、医療・福祉の面だけでなく、より幅広い視野で多文化共生社会をとらえる必要があったことが課題である。また、多文化共生について、先行研究にあたり、発展している都市との比較研究を行ったりと、研究手法に甘さがあった。また、外国人留学生だけではなく、技能実習生など労働者として居住している外国人をどれだけ巻き込み、多様な立場の意見をいかに反映させられるかが課題である。さらには外国人もまちづくりの主体者となるための仕掛けなど、協働のあり方も課題としてあげられる。

2 年 PPL「課題研究」

九里学園高等学校では、1965 年から卒業研究として 3 年次に「自主研究」を課してきた。現在は、これまでの知見をより発展し、2 年次に Personal Project Learning として「課題研究」に取り組んでいる。基本的には 1 年次でのグローバル・ラーニングにおいて各自が見いだした課題をテーマとして研究を進めることで、テーマ設定を円滑にさせるねらいがあったが、実際には生徒の興味は多岐にわたり、研究テーマの設定に多くの時間を費やした。この PPL はハワイでのフィールドワークをカリキュラムの中に取り入れ、グローバルな視点から考察できるよう配慮している。

【2019 年度プログレスコース 2 年「課題研究」指導課程】

時期	内容	生徒の取り組み	教員の指導
1 年	SDG s を柱として貧困問題や食糧問題など世界の問題について生徒同士が学年縦割りでグループディスカッション、ワークショップ、模擬国連などを行いながら個人で課題研究を進めていくための素地を養う。	世界で起きている問題を自分事として捉え、その解決のために自分にできることを本気で考える。	具体的な情報を与えることで、生徒たちが自ら気づき考え、主体的に行動し、成長できるよう助言する。
2 年 4 月	岡本尚也著『課題研究メソッド ～よりよい探究活動のために～』をテキストとして、課題研究の進め方について具体的に説明。	自分の興味関心と社会課題の重なる部分にどんな課題があるか考える。	個別面談をしながら生徒の興味関心と社会課題を結び付けるためにアドバイス。
2 年 5 月	2 年生 1 人につき、課題研究テーマが近い 3 年生 2~3 人が付き、ゼミ形式で自分のテーマを説明し、アドバイスをもらいながら、テーマを具体的に生徒自身が研究できるように掘り下げていく。	個別に 3 年生や教員の指導を受けながら、情報をインプットし、具体的なテーマを設定する。	プログレスコースの教員 5 名がそれぞれの生徒と肯定的に対話し、生徒の考えを引き出し、焦点を絞る。
2 年 6 月	自分のテーマに関する先行研究論文を Google Scholar などを利用して調べ、テーマに関する知識を得るだけでなく、研究の仕方を学ぶ。 仮説を立て、研究手法を考え、研究計画を立てる。	先行研究を参考にして、自らのテーマを掘り下げて、具体的な研究計画を立てる。	先行研究や関連する書籍を紹介しながら、できるだけ生徒がテーマを掘り下げやすいよう具体例を示す。
2 年 7 月 8 月	夏休みを利用し、研究計画に基づいて、校内外におけるアンケート調査、インタビュー調査、現地調査、ワークショップなど具体的に研究を進める。	各自、課題研究専用ノートに研究内容や考えたことなどを記録する。	生徒と外部の間に入り、課題研究への協力依頼や具体的なアドバイスをする。
2 年 9 月 10 月	これまでの研究結果をまとめ、考察し、中間発表を行い、他者と共有する。互いに参考にしながら自分の課題研究について再検証し、今後の計画を立てる。	これまでの研究を振り返り、考察し、プレゼンテーション資料を作成する。	まとめ方と発表の仕方を教え、生徒同士の学び合いを大切に指導する。
2 年 11 月	10 日間のハワイ研修旅行に行き、環境問題や貧困問題などの研修プログラムを通して、自らの課題研究テーマをグローバルな視点で考察し直し、現地のグローバル教育スタッフに英語で課題研究プレゼンテーションを行い、フィードバックをいただく。	自らの課題研究テーマを意識して、ハワイ研修プログラムに参加し、考察を行い、英語で課題研究プレゼンテーションを行う。	ハワイ研修を通してグローバルな視点で自らの課題研究テーマを見直させ、自分の課題研究の意義深さと重要性を自覚させる。
2 年 12 月 1 月 2 月	外部の全国高校生フォーラムや探究型学習発表会にて英語ポスターセッションや英語で発表などを行う。 研究報告会にて個人課題研究発表（英語でプレゼンテーション、英語や日本語でポスターセッション）、課題研究ポスター作成。課題研究論文完成。	プレゼンテーション資料、ポスター、論文の作成を通して、自分の課題研究を整理し、アウトプットする。	論文作成や発表の指導の中で、一人ひとりの生徒の限界を超えさせ達成感と自信を持たせる。

【2019 年度「課題研究」発表】

期日	研究発表会名	生徒氏名	発表内容
2019.9.11	九里学園高等学校創立記念式典	鈴木 茉衣	食育～親子のコミュニケーション～
2019.12.14	山形国際理解フォーラム	堀越 貴璃 宮田 耕平	フェアトレードと倫理的消費 ～フェアトレードタウンを目指して～
2019..12.22	SWG 全国高校生フォーラム	堀越 貴璃	Fair Trade Campaign in Kawanishi Town (英語によるポスターセッション)
2020.1.11	地域未来を拓く若人フォーラム	高橋 蒼	Save the planet using Organic Food (英語によるプレゼンテーション)

生徒たちは、当初テーマの設定と研究を進めていく方法がわからず大変苦慮していたが、一度テーマが決まると大変意欲的かつ自主的に地域協働を意識して学校外の方々にアンケートやインタビュー、ワークショップを行った。生徒たちの感想を聞いてみると「社会は厳しい!」ということであった。課題研究を通して「社会」と向き合う方法を学んだ生徒たちは、自分の考え方をしっかりと持って話したり行動したりすることができるようになり、驚くほど大きく成長した。

5名の生徒が2月のグローバル・サミットに参加し、研究成果を英語で発表する予定であったが、残念ながらコロナウィルスの影響で台湾の生徒へ向けて発信し、さらにフィードバックをもらうことができなかった。

【参考文献】『課題研究メソッド ～よりよい探究活動のために～』岡本尚也 著 啓林館

課題研究 の目的

課題研究は、社会的・学術的发展のために行われるべき活動である。

個人的な
興味・関心



ローカルな社会課題

課題研究

社会的な
意義・汎用性



グローバルな社会課題

The Spread of Halal Food

Fuwa Ito

Introduction

The Tokyo Olympics and Paralympics will be held in 2020. Japan needs to consider what measures are necessary to support the increase in the number of foreign tourists. Japanese people have low awareness of multiculturalism. Japan should tell foreigners about Japanese culture but Japan also has to improve the food infrastructure so it can accommodate people with different food needs and be able to prepare various kinds of meals. Specifically, for people who come from other Asian countries who often visit Japan. This study focuses on Yonezawa City where the author lives and the expected economic effect by the provision of such meals in the city. In this research Halal food was chosen from many kinds of meals.

Purpose of This Research

To achieve food diversity, it is necessary to consider and grasp the present situation in the city. The research focuses on Halal food in order to spread this. This study uses an interview and a questionnaire to achieve this.

What is Halal

The Japan Food Barrier-Free Association says that “Halal” means “permissible” in the Arabic language. “Haram” is the opposite word. What objects constitute Haram is decided by how an animal is slaughtered, processed and so on. This research is focused on just Halal food.

Preliminary investigation

• research question

Are there things that study abroad students get upset about?

Does Yonezawa City have an appropriate food infrastructure?

• result of interview

There are few stores that sell Halal food, so study abroad students can't eat meat bought in Japan. “Washoku” or Japanese food often contains “mirin” which is made from alcohol. So, these students can't enjoy Japanese food.

• discussion

Yonezawa city deserves recognition by changing Yonezawa beef that is the specialty of the city to comply with the guidelines of halal food from foreign countries. So, it is thought the city will become known better, which in turn adds value to the beef. By doing so, tourists from within Japan or foreign countries is thought to increase as the city will become more famous.

Main Research

• research method

My class start a Halal branch at the school festival. Questionnaire about the degree of recognition and bias of Halal food.

• research question

Is the degree of recognition of Halal low?

Is there bias of Halal?

• question contents and results

Q1: Do you know about Halal food?

A1: Yes-28% No-72%

Q2: What is your impression of Halal food?

A2: Good-7% Bad-7% Not sure-86%

Q3: How do you feel after eating Halal food?

A3: Delicious-77% Ordinary-23% Not Delicious-0%

Q4: Has your impression of Halal food changed?

A4: Yes-74% No-26%

Conclusion

The Degree of recognition of Halal food is low, as the opportunity to know about it might be few. One reason for this is that information concerning Halal isn't taught in elementary or secondary education. Furthermore, there are problems not only with the impression of Halal but also the impression of Islam. Additionally, the impression of Halal became better by offering a choice of Halal food to people.

References

Japan Food Barrier-Free Association

Japan Food Barrier-Free Association HP

<www.halal.or.jp/ 2019.1.18>

The Activation of Nagai's agriculture by Rainbow Vegetables.

Rana Yokoyama

Introduction

Recently, many rural areas are in decline in Japan. So most local governments are taking actions to stimulate their towns. Nagai city where the author lives focus is on this local activation. Various groups in Nagai are increasing their activities year by year to stimulate this town.

As population and industry are still in decline. These problems are difficult to solve.

According to such conditions, the author carries out this study to highlight the positive points of Nagai City and communicate this information nationally in Japan.

Previous Studies

Nagai city carried out a questionnaire to people living in Nagai city.

The first question was, "Is it your intention to live in Nagai city from now on?" 71.7% of the people answered "Yes." And 13.9% of the people answered "I will live in Nagai for the time being." According to the results, more than 80% of the people intend to continue living in Nagai in the coming future. The reasons are good environment and delicious water.

Second question was, "Is there communication between you and your neighbors?" 84.9% of the people answered "Yes." This result shows us the strength of Nagai's community spirit.

Presently Nagai City is carrying out the "Rainbow Plan". It is a project to encourage the sustainability of Nagai. Waste products of organic materials are converted into compost and used in the production of vegetables.

Purpose of This Research

The appeal points of Nagai city are good environment and delicious water. This information is supported by previous studies. So, this study focuses on revitalization of agriculture. And the purpose of this research is suggesting a new strategy that will publicize these points nationally as a main feature of Nagai City living. In addition to that, this research mentions about the strength of Nagai's community's spirit.

It is important for Japan to revitalize rural areas like Nagai City as there is an abundance of a natural supply of fresh water, air, energy and food.

Research Question

Is agricultural industry active in Nagai City?

Result

The interview was conducted in Nagai City Hall. The author interviewed the employees of the agricultural section of Nagai City Hall.

Question 1

What are the advantages and disadvantages of farming in Nagai city?

They said, "One advantage is delicious water. However farmers can't sell their products outside of Nagai City as local products of Nagai, so this is one disadvantage."

Question 2

How do you sell the products of Nagai to urban areas?

They said, "it is difficult to sell them easily as they are not well known by people living in urban areas".

Question 3

What is good about Nagai's vegetables?

They said, "Rainbow Vegetables are grown locally in Nagai. Compost is produced in Nagai and used to grow these vegetables. Therefore Rainbow Vegetables have high nutritional value."

Question 4

What are the present problems of the agricultural industry?

They said, "It is the difficulty of improving the recognition of Nagai's Rainbow Vegetables."

Discussion

This interview shows a problem that the vegetables of Nagai can't be sold as local products of Nagai in urban areas. And also, there is no specific measure to improve the recognition of Rainbow Vegetables.

According to these results, it is important to focus on how to improve the recognition of Rainbow Vegetables in urban areas in this study. And also, Nagai's sustainable activities can be more recognized in urban areas by improving the recognition of Rainbow Vegetables. People in urban areas may be interested in Nagai as a result. So, it leads to not only introducing the new appeal of Nagai but also re-introducing the already known positive points of Nagai. Also by doing this, Nagai City's agricultural industry will be revitalized and the recognition of Nagai's desirability in urban areas will be improved.

Suggestion

According to this study, the author suggests a service that Nagai City delivers locally grown natural food to people in the local area and urban areas. Various types of Rainbow Vegetables, local specialty vegetables and

The Activation of Nagai's agriculture by Rainbow Vegetables.

Rana Yokoyama

traditional food of Nagai and Yamagata prefecture. Knowledge of vegetables and local specialties which are less common and well known can be shared. A pamphlet of Nagai city should also be included.

The customers would be people from Nagai or Yamagata, parents who have children living in urban areas and people who are interested in Rainbow Vegetables and natural food. And in turn these customers will promote these products to their friends. By doing so, people from Nagai or Yamagata play a key role in publicizing the goods and become a medium of advertising. And also, Nagai City can use the people who were originally from Nagai and moved to urban areas. Moreover, Nagai City can use the appeal and the strength of its community to promote its products by sharing information, called "Osusowake" in Japanese.

Finally, the effects of this service on Nagai will be that the city can publicize its appeal to people in urban areas. Also Nagai City can sell Rainbow Vegetables to them by improving the level of recognition of these products. This service will have an effect on the agriculture industry in Nagai and customers can benefit from the knock on effect of Nagai's Rainbow Plan system.

Reference

Questionnaire of Nagai City to residents
2017.5
<<https://www.city.nagai.yamagata.jp/>>

For Multicultural Growth of Yonezawa City

Introduction

Recently, a growing number of foreigners are coming to Japan. Is Yonezawa City a livable place for foreigners? To solve this question, the research investigates the current situation and how the city will become an attractive city for foreigners.

Purpose of This Research

The research was undertaken in order to make clear how Yonezawa City could become a multicultural society.

Research Question

Are foreigners living in Yonezawa city having troubles?

Result

The questionnaire was conducted with the help of study abroad students from Yamagata University.

Question1

What should be written in English at restaurants?

The answer was to write the menu in English and show photos of the cooked food.

Question2

What trouble do you have in restaurants?

The answer was that they couldn't read the menu especially the Chinese characters, Kanji. Also there is often no button to call a clerk.

Question3

What kind of service do you want at restaurants?

The answer was to be able to make reservations by using a cell phone application, and to be able to choose Japanese food according to religious preferences.

Question4

Where should information be presented in English in the city?

The answer was at restaurants, supermarkets, government offices and pharmacies.

Question5

What kind of information do you want at the time of a disaster?

The answer was learn the location of the evacuation site, how to prepare an evacuation bag and the type of disaster unfolding.

Question6

How do you want the information conveyed at the time of a disaster?

The answer was E-mail, the official Facebook page of Yonezawa city, TV, and through the Yamagata University webpage.

Question7

Do you know of the hazard map?

The answer was most people didn't know.

Question8

Do you know Yonezawa City has a hazard map?

The answer was no one knew.

Conclusion

Yonezawa City has insufficient policies for supporting foreigners. Yonezawa City should write hazard maps not only in Japanese but also in English.

Yonezawa city provides disaster information only on the internet. However, Hachioji city provides various information not only on the internet but also on paper. Yonezawa City should do the same.

A new approach is needed for Yonezawa City to achieve multicultural growth.

グローバル・サミット

1 概 要

日本と台湾の高校生が一堂に会し、課題研究に関する研究成果や、グローバル/ローカルな社会課題の解決案や提言のプレゼンテーション発表や持続可能な社会に関するワークショップをする学術交流を行う。

さらに親睦を深め、国際交流を促進する夕食懇親会を開催する。一部通訳は入るが、生徒の発表、ディスカッションでの使用言語は英語とする。

開催日：2020 年 2 月 6・7 日

会 場：高雄市立高雄女子高級中学

2 目 的

グローバル・サミットを通して参加した生徒が視野を広げ、グローバルな視点で持続可能な社会を目指して主体的に取り組む姿勢を涵養する。また、互いに刺激し合うことで、これからの探究学習の質的向上を目指す。

この学術交流を通して、参加者が S D G s への理解を深め、社会課題の解決にともに取り組んでいくネットワークを構築する。

参加者が日本と台湾をつなぐ架け橋となり、より強固な友好関係を構築するとともに、未来への懸け橋にもなり、将来的に豊かな社会を構築する主体者となる。

3 主 催

学校法人九里学園 九里学園高等学校

公益社団法人 山形県観光物産協会

4 共 催

学校法人新庄学園 新庄東高等学校（連携協定校）

5 後 援

山形県

米沢市

米沢観光コンベンション協会

山形県教育委員会

台湾政府教育部

高雄市

台湾国際教育旅行連盟

6 参加校

日本：九里学園高等学校・新庄東高等学校

台湾：高雄市立高雄女子高級中学・高雄市立高雄高級中学・高雄市立瑞祥高級中学

国立科学工業園区実験高級中学・国立桃園高級中学・国立屏東高級中学

台湾国際教育旅行連盟台北市分会から連合チーム

(以上 8 校及び 1 チーム 45 名が参加)

その他：米沢商業高等学校（生徒 2 名が研修として参観）

山形工業高等学校（教員 1 名が研修として参観）

7・報 告

開催にあたり、山形県観光物産協会と準備を進めてきた。物産協会は県から委託事業としてこれまで台湾からのインバウンド政策を進めており、台湾の国際教育旅行連盟との結びつきも強いと、共同主催とすることで山形県からの理解を得られやすく、また、台湾側との協力関係がスムーズとなり、計画、準備がしやすくなるという利点があった。また、協会としても、インバウンド効果を考えたとき、実際に山形県の生徒が台湾で学術交流をすることが、今後の山形県の交流事業にとって、非常に大きな影響があるという点で WinWin の関係があった。したがって、二日間のサミットの中に生徒たちが山形県の観光を PR することも計画に入れており、夕食懇談交流会時には花笠音頭を披露し、台湾の生徒に教えて一緒に踊ることや、二日目には物産協会が行う台湾の教員向けの商談会において、生徒が本県の観光や学校交流をプレゼンテーションする場を設けた。生徒にとっては地域の魅力を探るいい機会であった。

本校としても台湾に姉妹校があるということもあり、また、費用の面からも生徒・学校両者にとって負担が少ないということから、本事業終了後も見据えた持続可能なプログラムの観点から台湾での実施を決定した。

本来であれば、山形県から新庄東高校以外にも参加校を出したいところではあったが、年度途中での募集であったため、各校予算の関係で参加者を出すことが出来なかったようだ。それでも他校から問い合わせがあったこと、実際に見学だけの参加ではあるが、興味を示して同行を決定してくれた学校があったことは次年度へ向けて大きな成果である。

開催に向けて、本校担当職員と物産協会の担当者が数回会議を持ちながら情報を共有し、その情報を台湾の国際教育旅行連盟側に送ることで進捗を図ってきた。連盟側も非常に強い関心を示してくださり、高雄女子の校長は会場の提供を申し出てくれるなど積極的な動きもあり、また、連盟は開催に当たってこういったイベントにおける台湾側の習慣等について助言もしてくれた。会場の下見等も物産協会のスタッフが台湾への出張の際に行ってくれたため、本校の負担が軽減した。

開催直前に新型コロナウイルスの影響で開催が中止となってしまったが、開催へ向けてのノウハウは蓄積されたため、次年度はぜひ成功させたいと考えている。

Global • Summit Schedule

6 th Feb (Thu)		
Time	Program	Remarks
1 3 : 0 0	Reception	
Opening Ceremony		
1 3 : 3 0	Opening Declaration	Yamagata Tourism & Local Products Association
1 3 : 3 2	Organizer's Remarks	Principal of Kunori Gakuen
1 3 : 4 0	Guest's Remarks	Kaohsiung City
1 3 : 5 0	Guest's Remarks	Chinese Government
Presentation/Poster Session		
1 4 : 0 0	Presentation: 11 groups Poster Session: 7 groups	
1 7 : 3 0	Wrapping up	
Dinner Exchange Party		
1 8 : 3 0	Organizer's Remarks	Yamagata Tourism & Local Products Association
1 8 : 3 5	Toast	The Taiwan International Association for Education Tours
2 0 : 4 5	Closing Remarks	Kunori Gakuen Student
7 th Feb (Fri)		
Time	Program	Remarks
8 : 4 5	Workshop "Declaration for SDGs"	
Closing Ceremony		
1 1 : 0 0	Overall Comment	林文傑氏
1 1 : 1 0	Conferment of the Certificate	Principal of Kunori Gakuen
1 1 : 3 0	Participant's Comment	Representative of Kunori Student
1 1 : 3 5	Organizer's Remarks	Principal of Kunori Gakuen
1 1 : 4 5	Guest's Remarks	The Taiwan International Association for Education Tours
1 1 : 5 5	Commemorative photo	
1 2 : 0 0	Close	

ハワイ サステナビリティ FW 研修

1) 目的

① 持続可能な社会を学ぶ

- ・環境や平和、科学技術、伝統的な文化の継続など、ハワイでの持続可能な社会構築の取り組みに触れ、持続可能な社会のあり方を考える。
- ・貧困や多文化共生、日系人の歴史などを学び、私たちが持続可能な社会を創るために何ができるか考える。

② 国際理解

- ・ホームステイや学校交流、その他の体験型学習を通して異文化を理解し、受容、尊重する人間性を養う。
- ・積極的に英語でのコミュニケーションを図り、コミュニケーション能力と英語力を高める。

2) 概要

日程：令和元年 11 月 19 日～11 月 28 日

場所：ハワイ・オアフ島

参加生徒：9 名 プログレ斯科ース 2 学年

協力団体：ハワイ・グローバル・エデュケーション・ファンデーション

3) 日程

月日	午前	午後	備考
11 月 19 日		米沢から成田・ホノルルへ	機内泊
11 月 19 日	平和学習（パールハーバー）	燃料電池自動車工場視察	ホームステイ
11 月 20 日	学校交流	NPO 視察 （貧困層への栄養指導）	ホームステイ
11 月 21 日	ハワイ州農務局訪問	日系人センター訪問	ホームステイ
11 月 22 日	食育学習（オーガニック）	ケアセンター訪問 （貧困対策）	ホームステイ
11 月 23 日	ホストファミリーと過ごす		ホームステイ
11 月 24 日	ホストファミリーと過ごす		ホームステイ
11 月 25 日	ハワイ文化学習	サステナビリティ学習 プレゼンテーション	ホテル泊
11 月 26 日	自然学習	自主研修	ホテル泊
11 月 27 日	ホノルル発 成田へ	翌 28 日 米沢着	

4) 検証

このハワイ研修はグローバル・ラーニングにおいて、視点を広げ、学びを深めるためのフィールドワークと位置付けて実施している。そのため、プログラムも貧困や平和、食と健康、環境、多文化共生など、グローバルで学ぶ領域に沿って展開している。担当者が2年前にハワイに視察に訪れ、提携団体である「ハワイ・グローバル・エデュケーション・ファンデーション」のスタッフと5日間かけてオアフ全土をめぐって研修先を検討した。実際に日系人センターで日系人の歴史を学び、日系人との対話を通して、このグローバル社会における日本人としてのアイデンティティを考えることが出来た。また、ハワイのアプアアを中心とした文化の本質を体験的に学ぶことが出来たため、生徒たちは文化の重要性を認識し、また、循環型社会が持続可能な社会の構築に必須であり、この置賜地区にもそれが可能であるとの認識を新たにした。さらに、実際に貧困地区での栄養指導、改善活動を行っている LOOTS という施設訪問では、ガーデントゥテーブルが最も効果的であるとの報告を受け、自身の課題研究のヒントとした生徒もいた。

予算の関係で今年度はオアフ島のオーガニックファームへの訪問が出来なかったため、再度提携団体と検討し、グローバルにより沿った形でのフィールドワークが出来るようにしたい。



フィリピン 英語×ソーシャルアクション研修

1) 目的

- ・語学研修、ソーシャルアクション（ボランティア）、ホームステイの3つの活動を通じて、語学力をつけつつ社会と関わり、他者と共有・行動する能力を身につける。
- ・フィリピンの文化や風習を体験し、また、フィリピンの社会課題を学びながら、現地で支援を行っている NGO でボランティアをすることで、グローバルな視点を養い、社会貢献への意識を涵養する。

2) 概要

日時：令和元年7月19日～8月5日

場所：フィリピン・イロイロ市

参加生徒：2名（3年生）

協力団体：NPO 法人 LOOB

3) プログラム

月日	午前	午後	備考
7月19日		成田へ出発	ホテル泊
7月20日	成田発 フィリピンへ	マニラ発イロイロへ	シェアハウス泊
7月21日	オリエンテーション	観光	シェアハウス泊
7月22日	英語学習	ゴミ山コミュニティ訪問	シェアハウス泊
7月23日	英語学習	子どもたちへの教育活動	ホームステイ
7月24日	英語学習	週末ボランティア企画	ホームステイ
7月25日	英語学習	先住民コミュニティ訪問	ホームステイ
7月26日	英語学習	フェアトレード活動	ホームステイ
7月27日	ボランティア活動		ホームステイ
7月28日	ホームステイでオープンタイム		ホームステイ
7月29日	振り返り	LOOB 活動補助	ホームステイ
7月30日	英語学習	ゴミ山コミュニティ訪問	ホームステイ
7月31日	英語学習	子どもたちへの教育活動	ホームステイ
8月1日	英語学習	フェアトレード活動	ホームステイ
8月2日	プレゼン準備	プレゼンテーション	シェアハウス泊
8月3日	ギマラス島ビーチ&世界遺産見学		ターミナル泊
8月4日	ギマラスからイロイロへ		シェアハウス泊
8月5日	イロイロから成田へ	成田着	ホテル泊
8月6日	成田から米沢へ		

4) 検証

ゴミ山で暮らすスカベンジャーのコミュニティに入り、その家庭にホームステイをしながら彼らと行動を共にすることは、多感な高校生にとって、人生観をひっくり返すような大きな体験であった。貧困＝不幸という固定観念を持っていた生徒が、実際にスカベンジャーと生活を共にすることで、彼らの精神的な豊かさに触れ、「幸せとは何か」「貧困とはどういうことなのか」と考え、それらの定義を彼らなりにとらえなおすことができた。また、彼らの支援活動として LOOB が行っているフェアトレード商品を自分たちも作成してみることで、フェアトレードへの考え方も大きく変化した。何より、この経験から貧困問題が自分事となり、自分たちの生活様式を見直すようになった。そして、学びの意識が変わり、授業やほかの探究学習への取り組む姿勢が変わった。かれらの行動変容を促すという点において、非常にいい海外研修であったと考察される。この経験によって、コミュニティ開発という視点をもって、進学先を選択したり、国際協力を学べる大学を進学先として選択したりと、進路にも影響を与えた。

プログラムは LOOB が実際に公開しているスタディツアーを本校生用にカスタマイズして組み立てている。今回は夏休みを利用した開催であったため、1、2年生が部活動の影響で参加ができなかった。また、台風の影響で最終日のギマラス島での散策からイロイロに戻ることが出来ず、帰国便に影響が出た。したがって、開催日時の検討が必要である。



2019 Kunori Global Camp 九里地球塾

開催日時：令和元年 7 月 13～14 日(1泊2日)

場所：ホテル樹林 (山形県山形市蔵王温泉)

参加者：九里学園生徒 18名 新庄東高校生徒 9名 山形西高校生徒 1名

山形大学留学生 9名 (中国・フィリピン・マレーシア・ボリビア・フィジー)

九里学園教員 7名 新庄東高校教員 2名

合計：生徒 28名 留学生 9名 教員 9名

[活動目的]

山形大学に在籍している多様な国からの留学生との協働体験プログラムを通して、グローバル人材としての素養を育むことを目的とする1泊2日の宿泊合宿。

以下の3つの素養を育むためのプログラムが実施される。

1. 多様性の受容と尊重

多様な国の文化・習慣・価値観などに触れ、それらを理解し、尊重する国際感覚を養う。

2. 想像力・表現力・思考力

留学生との様々なグループワークやディスカッションを通して、想像力・表現力・思考力といった能力を育む。

3. チームワーク

共同生活の中で、仲間意識を持ち、共に目的を達成する喜びや、相互協力の大切さを体感する。

[活動内容]

1. Ice Breaking

初対面の参加者同士でも打ち解けられるよう、ゲームを通して楽しくコミュニケーションを取る。

2. Workshop 1: Learn New Languages

現代は、多言語化、多宗教化、多文化化が進んでいる。そこで、多くの言語に触れ、その良さや多言語を学ぶ楽しさを知る事ことは、現代に生きる私たちにとって大切なことである。当然今回の協力者の出身国の言葉はそれぞれ違う。公用語は英語やスペイン語でも、ローカルな言語を使用している場合もある。そこで、自分の好きな言語を選んで、その国の言葉で自己紹介などができるよう学ぶアクティビティ。

留学生と共に生徒は屋外に出て、蔵王の大自然の下でのびのびと活動した。留学生の使用言語ごとにグループを作り、生徒が学びたい言語のグループに加わり簡単な会話のレッスンを受けた。留学生の出身国と使用言語は、ボリビアのスペイン語、中国の中国語(マンドリン)、マレーシアのマレー語、フィジーのフィジー語、フィリピンのタガログ語

の5言語。

3. Workshop 2: Problems, the Worst Issue

世界が抱える問題の中で、最も深刻で大きな問題とは何か考えるワークショップ。人・国・文化が違えば、問題の捉え方も異なるため、自分とは異なる問題への認識を学ぶことで、多様な支援から世界の抱える問題を捉えていくためのワークショップ。それぞれの立ち位置からなぜその問題が最も深刻で大きな問題としてとらえたのか発表した。

4. Workshop 3: My Education

SDGs 4 「質の高い教育をみんなに」について考える。世界では、教育を受けられない子ども達がたくさん存在し、その理由も様々ある。そんな子供たちの現状を理解し、また教育をめぐる環境について考え、どうして教育が必要なのか議論する。そのことを通して教育格差や教育の大切さ、世界の不平等について考察を深めた。

5. Workshop 4: My Story

留学生の協力者から、「My Story」というテーマで自分の国の紹介、なぜ日本へ来たのかを1カ国につき15分程度でプレゼンをしてもらい、各国の文化や日本へ来た目的について学ぶ。もちろん知らない文化について知る楽しさはあったが、中国の中の多様性も知ることができ、有意義であった。また、学びの目的意識や越境体験のすばらしさなどが留学生から語られることで、生徒たちの留学等への関心も高まった。

6. Workshop 5: Waste Problem

世界で直面しているプラスチックゴミ問題とリサイクルの問題について考えるワークショップ。クイズ形式でプラスチックゴミの状況やリサイクルの現状などについて理解を深め、私たちがシングルユースのプラスチック製品を一日のうちにどのくらい使うか可視化した。その上で、この問題の解決策を考えて、自分たちの解決策を発信するロゴをグループごとに考え、作成した。誰にでも分かりやすく、伝わりやすいユニバーサルなデザインはどのようなものか考えながら多くのアイディアが出され、ユニークなロゴが集まった。

7. Workshop 6: Cup Stacking

最後に、参加者全員で一つのもので作り上げるアクティビティ。カップスタッキングは、チームビルディングに有効なアクティビティ。アクティビティの最後に心をつなげて作り上げることで、参加者同士の絆を一層深めた。そこには言語や文化、国の違いを乗り越えて、ただ仲間、そして地球市民として存在する彼らの姿があった。

EDGE-NEXT

グローバル人材としての自覚と資質を醸造するために、本校では、山形大学国際事業化研究センターが主催する、文部科学省次世代アントレプレナー育成事業である「山形大学 EDGE-NEXT 人材育成プログラム」に参加し、大学生や社会人向けの起業家教育を受講した。

5月、6月の基本講座を受講しながら、7月には山形大学と連携協定を結んだ。

講義はオンラインでの受講を基本としたが、希望生徒は本校が参加しない講義についても山形大学に足を運び、講義を受けた。

【2019 年度 EDGE-NEXT 参加講座】

日時/場所	内容	講師
5月25日 /本学	人を動かすプレゼンテーション	外資系大手 IT 企業 澤 円 氏
	Idea, Passion, Start with Why ～人は「What」ではなく「Why」に動かされる～	(株) Just on time 代表取締役社長 Manjot S. Bedi 氏
6月22日 /本学	グローバルコミュニケーションの実践	リリース・トランスポート通訳者 莉々 紀子 氏
12月7日 /山形大学 米沢キャンパス	ケースディスカッション「株式会社いろどり」	慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス 一般財団法人 SFC フォーラム事務局長 廣川 克也 氏
	基調講演	Google Japan 原 邦雄 氏

上記以外に、Edge-Next のプログラムの一つであるグローバル・コミュニケーションズ（実践的英語コミュニケーションスキルプログラム・全6回）にも多くの生徒が参加した。

さらに、8月に行われた「みちのくイノベーションキャンプ」にも3名の生徒が参加し、ソーシャルビジネスについて実践的に学ぶことができた。

・澤円氏の「人を動かすプレゼンテーション」では、講義自体がプレゼンテーションの模範を示しており、写真の使い方や話し方などの具体的な工夫が見られた。素晴らしいプレゼンは、何かを始めたくなるやめたくなる、変えたくなる、会いたくなる、伝えたくなるものである。聴衆に、持って帰って配れるものをプレゼントするのがプレゼンテーションであるということを学んだ。

・廣川克也氏によるケースディスカッション「株式会社いろどり」では、徳島県上勝町で葉っぱ（つまもの）を中心とした新しい地域資源を軸に地域ビジネスを展開し、20年以上にわたり農商工連携への取り組みを町ぐるみで行っている事例をもとにしてグループディスカッションを行った。ディスカッションにおいて重要なのは関係の質からスタートすること。思考の質も高まり、行動の質が高まり、結果の質が高まるということを知った。ケースディスカッションは、慶應義塾大学や立命館大学などで行われているもので、ケース（実際の企業、組織が有する経営課題を記述した教材）を事前に読み、各々の視点で経営分析を実施し、経営課題に対しての意思決定の内容やその理由を教員の誘導の下で発表し、他の受講生や教員と議論していく。ケースは学習教材だが通常の教科書的なものとは異なり、内容は経営現場の各シーンの事実やデータ、登場人物の会話等が書かれている。学ぶべき知識や理論などの答えはケース内にはほとんど与えられておらず、受講生自身が討議を通じて考えていくことが求められており、受講生自身が主体的に学ぶ学習方法である。

資料

令和元年度

地域との協働による高等学校教育改革推進事業 研究成果報告会

議事録

日時：令和2年2月15日 10:00～16:20

次第：

1. 校長挨拶
2. 基調講演
3. 担当生徒による研究内容のプレゼンテーション
4. 模擬国連・ポスター発表
5. 事業概要説明
6. 講評

<基調講演講師>

山形大学国際事業研究センター 国際事業化研究センター長
小野寺忠司教授

<運営指導員>

尚絅学院大学 森田明彦名誉教授
東北公益文化大学 スルトノフ・ミルドザイド教授
JICA 東北 市民参加協力課長 本田勝様
米沢栄養大学 北林蒔子准教授

1. 校長挨拶

本日は、九里学園高校の研究成果を見て頂くためにお集まりいただきありがとうございます。九里学園高校では、これまでに様々なグローバル人材を育てるための活動を行ってきました。5年前には、文部科学省が提案したSGH事業に、全国の様々な方と活動ができるという理由から申し入れをしました。SGH認定校になると、様々な数値目標が提示されるため、生徒の希望に関係なく国として人材を育成する強制的な方針に従う必要があるため、そういった数値目標に縛られずにSGHアソシエイト校として活動してきました。その取り組みを踏まえた上で、今年度開始した「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」の取り組みに発展してきたと感じています。この取り組みは、グローバルな考

え方でありながらローカルに活動もできるという多彩な視野をもった生徒を育てることを目標としています。日本で広まりつつある SDG s に基づいた学びは、生徒にとってひとつの視点として学び発信していかなければならないという考えに発展してきたことは、SDG s の取り組みを行っていた時代からの流れから、先見の明がある先生方の試行錯誤の結果、このような教育に方向性を切り替えていくチャンスがあったことは幸いだったと思っています。

今年度は 1 年目なのでこれから開発、解決していかなければいけない内容を発表させていただきますので、是非皆さんのご意見を頂けたらありがたく存じます。

2. 基調講演

山形大学国際事業化研究センター 小野寺忠司センター長

「起業家育成教育 ～いま必要な人材とは～」

「起業家」というと、あまり身近に感じられないとお感じになる方もいらっしゃるかもしれませんが。起業家育成は日本で過去 30 年間なかなかうまく進まずに来た課題だからです。その結果、日本経済の低迷、世界にアプローチできるようなグローバルな日本企業がなかなか生まれないという現状があります。その課題を解決し、大きく言えば日本をどう再生していくかという根本的なアプローチをしようということで、文部科学省が平成 29 年から Edge-Next(エッジネクスト)というプログラムを発動させました。各大学がそれを採択し、いま日本全国に取り組むを行う大学があるわけです。

世界中の企業の時価総額ランキングの比較表をご覧ください。時価総額とは、世界の投資家が各企業の成長の可能性を判断して投資を受けた企業のランキングになります。1989 年と 2019 年のランキングを比較していますが、1989 年には 1 位の NTT に次いで銀行系の日本企業がバブルの影響で海外進出を果たし、多く投資を受けて伸びていたわけですが、2019 年になると 1989 年に 8 位だったトヨタ自動車が 46 位に入っている以外は、50 位以内に入っている日本企業はありません。つまり日本企業が世界を牽引している時代ではなくなったということです。シリコンバレーのベンチャーキャピタルの方々と話をしても、日本のグローバル化が衰退しているという実感を持っています。2 年前には IR（企業が投資家に向けて経営状況などを発信する活動）で、豊田章夫社長は 100 年に 1 度の変革期だと宣言しました。また、トヨタ自動車の競合相手は自動車会社ではなく、巨大プラットフォーマーの Google だとも言いました。トヨタ自動車もプラットフォーマーになるために買収なども行っていますが、難しいと思われます。Instagram が 1000 億人のユーザーを獲得するのに 1 年かかっていないというスピード感をもってトヨタ自動車も新しい改革をしていかなければならないからです。大企業に就職出来たら安定できると考える時代ではないということを学生にも伝えています。

また、これから日本の人口減少と高齢化が進むと、地方ではますます新しい事業が生まれ

ないという課題があります。その課題に取り組むために、グローバルリーダーを育てる必要性があり、山形大学でも平成 30 年からその取り組みを行っています。起業家精神を持った人材の育成です。起業家精神を持った人材というのは、挑戦的でリスクを恐れずにチャレンジする精神を有し、独創的なアイデアを常に探究し続け、目標に向かって積極的に実行できる人材のことを言います。日本社会では「出る杭は打たれる」という風習がありますが、これからは「出る杭は引き上げてサポートする」時代でなければいけないと思います。

3. プレゼンテーション

(1) 2 年 5 組 堀越貴璃 「川西町フェアトレード運動」

世界で、公平公正な取引がなされないために貧困に苦しむ生産者に必要とされているフェアトレードに注目し、人と環境に配慮した世界の倫理的消費行動の促進と地域活性化を目的とした活動の世界からフェアトレードをなくす第一歩として川西町をフェアトレードタウンにする研究を行いました。

質疑応答① 川西町議会議員 吉村徹様

なぜ川西町にこだわってフェアトレードタウンにしたいと思ったのか。また、今回の課題研究を通して川西町について感じたもの、見えてきたものはなんですか？

解答

フィリピンに短期留学をした際に、貧困層の人たちの生活を目の当たりにし、世界で貧困で苦しむ人にアクセスすることができないか考えた。名古屋市でフェアトレード運動を行っているという事例を参考に、自分の地元である川西町でまず実現したいと思ったからです。そのための草の根活動として川西町で活動を行いました。

質疑応答② 二井宿自然栽培農家・たカラボ事務局長 小林温様

フェアトレードでない商品が主流であることについてどう思いますか？

解答

フェアトレード商品は、一般的に価格帯も高いので、それを積極的に日々購入することを推奨するというのではなく、フェアトレード商品について知り、その意味を分かったうえで購入する人が少しでも増えてわずかでも支援につながればいいと思います。

(2) 2 年 5 組 高橋 蒼 「オーガニックが地球を救う」

オーガニック食品によって地球環境問題解決の糸口を見出すことを目的としている。レストランや官公庁でのインタビュー調査やハワイのマーケットなどの見学を通して問題解決の方策を見つけるとともに、それについての学びや考えについて発信をしました。

質疑応答① 二井宿自然栽培農家・たカラボ事務局長 小林温様

有機農業が環境問題に貢献できるという観点からオーガニックを推奨するべきと考えていますか？または食べ物として健康に良いものを作り出したいということが第一なのでしょうか？

解答

オーガニックは広まりつつあるが、現状としてまだ概念が浸透しているとは言えない状況の中で、自分達自身がオーガニック商品に目を向けて、健康に良いものを口にすべきという考え方を広めていくことが先決だと思います。

(3) 1年生グループ発表① 「食と健康」

高島町が誇る有機農法における理念を受け継ぎ、その価値を未来へ伝承するために国内外へ向けて効果的に発信、普及を目的としています。フィールドワークを通して有機農法や昔ながらの知恵を体験し、その価値と課題を理解して問題解決の方法を探究する。また、食材の価値については米沢栄養大学の加藤教授の協力により科学的な検証も行いました。今後研究室との効果的な連携方法なども検討し、来年度は「たカラボ」の実行委員会と連携を取りながら協働で有機農業についての価値を検証していくことを目指します。

(4) 1年生グループ発表② 「子ども食堂」

貧困、特に国内に存在する相対的貧困を主題に行った探究活動から派生したプロジェクトであり、子ども食堂を数回開催することを目的とすることでその意義や運営のためのプロセスを知り、今後の本格的な食堂開設のためのノウハウを得て、支援者の獲得など、持続可能な子ども食堂について考えることを目的として活動を行いました。NPO 法人ゆあらさんとの共同開催による子ども食堂は9月と10月の2回、12月には九里学園主催の子ども食堂を開催することができました。

(5) 1年生グループ発表③ 「多文化共生」

外国人と一緒に地域の課題解決を目指した活動を通して、外国人居住者が真に社会を構成する一員として市民参加できる社会を創生することを目標にします。外国人居住者との対話の場としてグローバルカフェを開催し、彼らが抱える本当の課題に耳を傾け、米沢市立病院等へのインタビューを含め実態調査も行った。

運営指導員の先生の講評 プレゼンテーションについて

(1) 米沢栄養大学 北林蒔子准教授

私は米沢栄養大学で管理栄養士になる学生を教えています。生徒は食が大切だという考えを持って入ってくる生徒が多いですが、前任校では杏林大学保健学部で看護師や救急救命看護の学生たちに栄養学を教えていました。その生徒たちは、自分がどんな食事をとるかで健康になるかといった意識の高い生徒は少なかったと感じています。九里学園の探求学習では、食を大事だと思って研究してくださることを、とてもうれしく思います。オーガニック食品もとてもいいですね。良さを感じていながら、虫がついていたり、形が悪くて価格も高ければ買わないということが起こります。私たち消費者が認識を変えて、食べるものが私たちの体を作るという事に理解を深めていくことができると良いのではないのでしょうか。今回の九里学園の発表が、そういった影響の一部を担ってくれると良いと思います。

(2) 尚絅学院大学 森田明彦教授

素晴らしい発表でした。今回のプロジェクトの発表準備のために、たくさん学ばれたのではないかと思います。私が SDG s の大切さについて気が付いたのは、皆さんよりも遅くて昨年7月くらいです。私はユニセフやセーブ・ザ・チルドレンや国連にも行った事があるので、SDG s の前身となる NDG s や子供のための世界サミットなど歴代の目標について知っていますが、一般の人にはなかなか届かなかったというのが評価でした。そのためか、SDG s についてもあまりその良さを認識していませんでした。ところがニューヨークでの SDG s の会議で、ナイジェリアの先生から SDG s が実際に届いているという話を聞き、考えが変わりました。九里学園の校長先生からグローバル型の探求授業と SDG s が学校の教育方針でもあるとお聞きして、的を射ていると納得しました。皆さんがやろうとしていることは、SDG s が本当に求めている事で、身近なところから持続可能な地球を実現していけるというターゲットに合った取り組みなので、これからも続けていって欲しいと思います。SDG s とは、皆さん含めて世界中の人々が実現したいと思う世界像なので、こういう世界を実現したいということを包括的に表現しています。九里学園の生徒さんが食や多文化共生や貧困といった特定の課題に取り組むことを通じて、すべての目標に影響するし関連しています。是非 SDG s の目指す世界の目標に対して、みなさんの活動がどう影響し関連するのかを考えながら、さらに活動をして頂けると、より深いかつ自分自身の身につくような活動になるのではと思いました。素晴らしい活動だと思います。本当にお疲れさまでした。

4. 模擬国連

議題：世界食糧安全サミット ― 2030 年の食糧をどう担保するか

参加生徒：1 年生 12 名 3 年生 7 名 新庄東高校 11 名 合計 30 名

司会：石川美咲、鈴木のぶえ、土屋みなみ

オーストラリア、ブラジル、ブルキナファソ、チリ、中国、フランス、ドイツ、インド、インドネシア、日本、クウェート、パラグアイ共和国、ロシア連邦、サウジアラビア、タンザニア、タイ、アメリカ合衆国、ザンビア 計 18 カ国

① アメリカ大使：山口美紗

アメリカの飢餓人口 5 % 未満、世界の飢餓人口は 12 % ― 8 人に 1 人が飢餓。

遺伝子組み換え作物（GM）の大量生産、大規模灌漑農業を実施している。バイオ燃料用トウモロコシで利益を上げている。世界の食糧問題を解決するため、これまでの食糧生産を見直すために、GM の研究機関を設立し、安全性を担保する。アメリカが一番多く資金を持ち、協力国を募る。また、食料を再配分するためにワールドフードバンクの設立を提案。実現のための協力内容を討論する。世界全体で食品ロス削減目標を立て、各国 5 ～ 10 % 程度の削減を目指す。

② パラグアイ共和国大使：島貫康平

フードロス問題解決のため、FAO の下部組織としてのインフラ部門の設立を提言。収穫後と加工段階でのロスを 10 年間で 10% 減らすことを目標に、冷蔵技術や運搬工程などの改善のための設備投資などを目的とした 500 億円の資金調達、技術提供を求める。削減できなかったパーセンテージに応じて資金を返却するといったペナルティーも課すことにする。

③ アメリカとブラジルによる最終決議案

GM の安全性を研究する研究機関をパラグアイに設立する。

気候変動に対応した GM の安全性の研究を行う場所はブラジル、ザンビア、チリが研究機関の設置場所を提供する。資金はアメリカ 30 億円、ブラジル 25 億円、チリ 13.5 億円 パラグアイ 4.5 億円 クウェート 4.5 億円を出資する。過半数を超える賛成により可決。

5. ポスター発表

SDG s のゴール達成を目標とした2年生による課題研究内容は、以下の通り。

- (1) 大滝 萌心 「健康寿命を延ばすために」
- (2) 岡崎 輝星 「米沢で L.G.B.T. への理解を深める」
- (3) 小林 遼緒 「循環型農業を広める為に」
- (4) Junji Ryan Chin Jun Hao 「新しい農業機械の開発」
- (5) 鈴木 栞菜 「伝統工芸品を後世に残す」
- (6) 鈴木 茉衣 「食育～親子のコミュニケーション」
- (7) 高橋 蒼 「オーガニックフードで地球を救う」
- (8) 堀越 貴璃 「川西町フェアトレード運動」
- (9) 宮田 耕平 「フェアトレードと倫理的消費」
- (10) 森 暁仁 「SDG s の認知度を高めるために」

運営指導員の先生の講評 模擬国連とポスターセッションについて

東北公益文化大学 スルトノフ・ミルドザイド 教授

私は東北公益文化大学の国際教養コースで国際協力論の担当をしています。人、物、情報があふれている中で多国間での依存性も増し、1つの国で問題が起きるとほかの国にも影響します。様々な国際的な問題がありますが、問題解決する方法は2つです。国際協力か紛争か。もちろん選択肢としては平和的な国際協力の方が良いわけですが、その平和的な解決をサポートする国際機関が国連です。今日行った模擬国連を見ていると、国際問題を解決するための交渉を本当に将来皆さんがやってもおかしくないと思います。

2016年から九里学園のSGHの取り組みを見ていますが、去年の模擬国連の取り組み方と比較すると、より自分の代表する国について調査してさらに詳しくなったと思いました。

また、今日は新庄東高校と合同で模擬国連を行う事によって、よりリアルな交渉ができていたと思います。3年生や卒業生のサポートがあることもとても重要だと思います。

食料問題とフードロスというテーマをひとつの課題と捉えて課題解決について考えているという点も素晴らしいと思いました。ポスター発表についても、SDG s のゴールにテーマを置いて調査、研究をされていることは魅力的だと思いました。生徒さんは若くてまだ研究経験は少ないと思いますが、調査結果をもとに解決策を提案していることが評価に値します。

6. 事業概要説明

研究開発推進委員長 鈴木精教諭

九里学園高等学校で実施している「想・創 まほらディアプロジェクト」についての説明が行われました。主にグローカルラーニング、グローバル・シチズンシップ・プログラム、教科横断型共同学習の3つを柱とした国際人の育成を目的とした教育を行っています。学校プロジェクトとして「食と健康」「子ども食堂」「多文化共生」の3つのプロジェクト、グローバル・キャンプ地球塾、グローバルタレント塾、山形大学 Edge-Next、留学、グローバルサミットの活動についての内容と成果について報告した。

7. 運営指導員の先生の総評

(1) JICA 東北 本田勝様

本日は、地域の課題、国際的な課題について個々の課題について認識を持って発表、議論をして取り組んでいるという事に感銘を受けました。こういったソフト型の問題解決の答えは1つではないと思うので、常に疑いを持って、多面的な視点をもってこれからも自分の考えを深めていって欲しいと思います。そうした取り組みによって、地域社会や国際社会が良くなっていくと思うので、皆さんの活躍に期待しています。地域のリーダーとして、また国際社会で活躍される方がここ米沢から出ていくことを期待しています。九里学園高等学校、新庄東高等学校の教育関係者の皆様の、生徒に対するご指導とご支援に心からの敬意を表します。

(2) 尚絅学院大学 森田明彦教授

本日は、基調講演の起業家教育論から模擬国連まで拝見して、私自身も色々と勉強させて頂きました。今回3回目の参加ですが、毎年生徒さん達だけでなく学校としても新しいことに挑戦されて教育活動に生かされているという事に感銘を受けました。様々な課題でテーマとしているSDGsを考える際に、ビジネスセクターとの協働が重要になると考えています。いま皆さんが取り組まれている活動は、これからさらに必要になっていく活動になると思いますので、さらに積極的に続けていってほしいと思います。

Q1 進路決定に影響を与えている。

Q2 学力向上に役立っている

Q3 受験に役立つと思う。

Q4 英語力向上に役立っている。

Q5 思考力が身についた。

Q6 リーダーシップが身についた

Q7 自分の考えをはっきり伝えたり、相手の意見を尊重し、建設的に議論ができる。

Q8 問題発見・解決の力が身についた。

Q9 チャレンジ精神がついた。

	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9
1 年生	3.00	3.09	3.36	2.82	3.45	2.55	3.18	3.27	3.18
2 年生	3.40	2.60	3.00	2.50	3.50	2.40	3.10	3.00	3.00
3 年生	3.25	3.06	3.31	2.56	3.75	3.06	3.56	3.25	3.31
全体	3.22	2.92	3.23	2.63	3.57	2.67	3.28	3.17	3.16

Q1 進路	最初は英語力を身に着けたいと思ってプロを選んだが、国内・外の様々なことをリンクさせて学習していくうちに、英語力を向上させるだけでなく、それをツールとしてどう作っていくか気が付いた。 将来なりたいものが決まっているから（評価が低い）。 大学の希望学部などの選択が国際学や地域学などになった。 グローバルの授業を通して自分のやりたいことが見つかった。行きたいところ（大学）が見つかった。 課題研究で調べたことが今の自分の目標になっているため。 グローバルの授業で世界の環境や貧困などの現状を知れたことで、将来の自分がどう動いていかなければいけないのかという目的が明確になった。
Q2 学力向上	世界の問題や地域の状況を知ることができて知識が増えました。プロジェクトが重なった時の勉強との両立が難しい。時間をグローバルに使って勉強時間が少なくなることもあった。受験に必要な知識にはなっていない。一般試験以外には役立つと思う。 他の分野に関連しているものがたくさんあり、学んだことを活用することができた。学習する際に探究活動で行ったことが結び付くようになったから。思考力が以前よりもついたことで自分の中での考えが広がり、また特に国語ではグローバルのこととの結び付けながら考えることができた。 意欲的になった。色々な国のことを深く知れるから。 語彙力が上がった。社会科のテストでグローバルの範囲が出題されたケースがあった。 知識は向上したが、学校の授業の学力向上だったらあまり思わない。 勉強＝グローバルというのはあまり実感がない 自分の無知さや勉強不足を痛感し、ニュースや新聞、日常生活から自分の学びとなるものを見つけだすことができ、結果的に学力向上に役立ったと思う。
Q3 受験に役立つ	高校で頑張ってきたことを話す場面や教養として、自分のスキルアップに役立つと思います。 大学入試改革が行われることで私たちの学びはそれに沿って学びを活かしていけると思う。推薦やAOなどで役立つと思う。面接のときに話すことが増えそうだから。AO 受験の内容がグループディスカッションだったこともあり、いろいろな人の意見を聴き、自分の意見を言う力役立ったと感じました。A

	Ｏだったためグローバルや留学が基盤となったことは間違いない。ＡＯ推薦での受験で合格を勝ち取れたから。ＡＯ入試、推薦入試、小論文の際にかなり役立つと思う。 ＡＯ入試で周りと差をつけなければならないが、このような授業のおかげで、差をつけられたと思うし、いろんな視点から物事を考えることを意識するようになった。 課題研究からたくさんの知識を得ることができるから。思考力がなど身につくから。 全国で大学は競うがＳＧＨやグローバルなどは数十校しかないなので、有利になり役立つ Edge-Next は進路に直接的に関与していた。 一般受験では直接的な結びつきがなかったため（低評価） 勉強や部活だけでなくたくさんのことに取り組んだことが自信になった。 小論ではプロ朝会で扱ったことが題材となった。また自信の目標を決める広い視野・知識を得た。 九里でのすべての経験が他にはないものばかりで、将来必要とされる人材を見据えてのものなので、大学にも社会にも必要とされる能力が見ついたと思うから。
Q4 英語力向上	英語での発表などがなかったのも、直接的には向上につながらなかったと思う。（使用はしたが）向上はしていない。 留学を通して、日本以外の国での政策や問題、文化について興味を持ち、海外の友達と英語でコミュニケーションをとって仲良くなることができた。模擬国連で英語で調べたり、英語翻訳から単語を覚えたりできるから。地球塾では英語でのコミュニケーションであったため。ハワイのホームステイが大変良かった。 留学は英語に対するモチベーションを高めてくれた。海外の記事や課題研究を英訳するときに英語力を使うため
Q5 思考力が身についた。	客観的に物事を見れるようになってきたと思います。取り組んでいる課題研究についてなぜこのようなことがおこなわれているかを理解しながら考えて取り組めた。答えのない問題について考える能力がついた。 入学したころに比べて、自分たちで考えて問題の解決を目指す力がついたと思うから
Q6 リーダーシップが身についた	多文化共生のプロジェクトを進める中で、計画を立てたり、分担したりして力をつけられたと思う。 自分の考えを持つことができたが、自分が積極的にリーダーシップをとれなかったと思う。上級生に頼る場面が多かった。１年・２年での活動が少ないため（低評価） 学年が上がるごとにやるべきことが分かったと思う。先輩や同級生たちを見て、リーダーとしてどうするかについて学ぶことはたくさんあった。その学びが受験でのグループディスカッションで活かすことができました。
Q7 コミュニケーション能力	模擬国連で、自国の意見を伝えたり、相手国と交渉をしたりして建設的にすすめられたと思います。 プロ朝会のときに相手の意見を尊重し、自分の考えをまとめて述べて思考の幅を広げることができた。 ポスターセッションを通して自分に自信がつき相手に伝える自信ができたから。グローバルで一番大切なのは相手を否定しないということだと思う。前より相手の意見を否定しなくなった。自分の意見も簡潔に伝えられるようになった。生徒内で話し合う中で、ほかの人の意見を尊重して行うということを前提に行ってきたので、以前よりも身についたと思う。
Q8 問題発見・解決の力が身についた	矛盾している部分や問題を少しづつではあるけど、みつけられるようになったと思います。プロジェクトを進めて課題を見つけてそれを解決するためにアクションプランを立てることができた。疑うことの大切さを知った。現状を踏まえて解決までもっていくプロセスを課題研究で学べたと思うし、フィール

た。	ドワークは自分にとって貴重な機会になった。
Q9 チャレンジ精神がついた。	発表やプロジェクトを通して、いろいろな人から意見をもらえて自信がついた。挑戦することで自分にとっての学びの利益になることが分かった。何事もやってみようと思えるようになった。台湾は中国語でわからないことだらけだったが周りの仲間と協力して何とかできた。国際フォーラムやフィリピン留学を通してとても向上したと思う。

Q10 SDGs や社会的課題について興味・関心が高くなった。

Q13 郷土愛が深まった。

Q14 地域の良さを発信したい。

Q11 SDGs について理解が深まった。

Q15 SDGs を意識して行動している。

Q12 問題意識を持ち、進んで本を読んだり、ICT を使ったりして調べたり、理解を深めている。

Q16 将来、地域の課題や世界の課題の解決へ向けて貢献したいと思う。

	Q10	Q11	Q12	Q13	Q14	Q15	Q16	Q17
1 年生	3.64	3.64	2.91	2.55	3.18	3.36	3.45	2.36
2 年生	3.30	3.30	2.60	2.30	2.80	3.10	3.40	2.50
3 年生	3.88	3.81	3.00	2.69	3.19	3.06	3.69	2.50
全体	3.60	3.58	2.84	2.51	3.06	3.18	3.51	2.45

Q10 SDGs や社会的課題についての興味・関心	ニュースでSDGs など学んだことがでけると気づくようになって関心が高まりました。ニュースやインターネットの記事をみるようになった。勉強する上で SDGs など考える機会が多いから。SDGs についてよく知りたいと日ごろから思うようになった。1 年生の時よりも本を読み考察するようになった。
Q11 SDGs についての理解	貧困や環境問題の部分は、授業で学んだのでわかるようになりました。自分には見えていなかった社会問題を SDGs を通して知った。
Q12 問題意識を持ち、進んで本を読んだり、ICT を使ったりして調べたり、理解を深めている。	プロジェクトの時以外はあまり調べていないので、もう少し本などを読むようにしたいです。社会問題の現状を知るために本を利用した。新聞やネットニュースなどの問題について知りたいという意欲が上がった。以前は全くという読まなかったが、最近はいろんな本を読むことを心掛けている。小説以外に知識として本よ読むようになり、わからないことがあれば、調べる習慣がついたから。前より本を読むようになった。1 つのジャンルではなく、いろんなジャンルの本を読むようになった。
Q13 郷土愛	高畠にこんなにすごい人がいると知らなかったし、もっとそういう人たちが増えていけばいいと思いました。世界を知ることは大切だが、まずは自分の国のことをきちんと理解すべきだと思った。勉強していく上で、地域について考えることが多く、大切にしなければいけないと思ったから。米沢という地域でくられることが多かったので、もっと地元のこと知るべきだった。
Q14 地域の良さを発信したい。	良さを発信して、過疎化などの問題の解決に少しでも貢献していきたいです。高畠町の有機農業への取り組みは世界に発信したいと思った。人口が減ってきているので少しでも興味を持ってもらいたいから。課題研究を通して米沢の良さを改めて知った。良さは発信したいが、人口が減少している中で移住者の取り合いをすること自体否定的にみているため、それよりも地元の住民にフォーカスすべき

Q15 SDGsを意識して行動している。	ゴミの分別の時やジェンダー平等についてのニュースを目にするときにSDGsを思い出すようになりました。食品ロスやプラスチック問題に対する考え方は生活で意識している。ゴミのことなどに気をつかうようになった。プラスチック削減についてマイバックをもったり少しでも減らせるようにしている。なるべく食品ロスをださないようにしたり、環境に良いものをつかうようになったから。コンタクト容器の回収活動への参加
Q16 将来、地域の課題や世界の課題の解決へ向けて貢献したいと思う。	少しでも自分が解決の手助けになるなら、貢献したいです。将来は青年海外協力隊になって、世界の問題に実際に触れて考えたい。授業の中で解決策を見出したり提案することが多かったので、将来はそれを実際に行ってみたいと思うようになった。
Q17 自分は社会を変える力があると思う。	次世代の私たちはこれから生きる人間であり、新しい社会をつくることができると思う。 一人では難しいが同じ気持ちのある人達と協力すれば可能だと思う。(低評価)
Q18 郊外の人たちとの出会いが自分に良い影響を与えている。	自分の課題研究のモチベーションになっていた。新東の生徒もLGBTについての活動をしていて、自分ができることやすべきことを考えるきっかけになった。地球塾などに参加していた他校の生徒の意見などいろいろな視点があって学びにつながると思う。自分たちの活動が評価されることはうれしい。人脈が広がり、考えも深まり、多様なコミュニティを知った。多くの人と関わったことで、様々な視点や考え方を取り入れることができたと思う。すべての出会いが新鮮で素晴らしいものだった。

朝の 15 分ゼミ

プログレスコースの生徒は毎週木曜日、朝 15 分を使い、ゼミ形式の討論を行っている。4～5 名を 1 グループとし、毎週担当者が新聞記事をもとにレジュメを作成し、その内容についてディスカッションを行う。レジュメは SDG s との関連性を明確にしながら作成し、SDG s 達成のための課題や解決方法、現状の分析などについて話し合う。目標は質問力を高めることとし、良質の質問をすることで論点を整理したり、考察を深めたり、視点を広げたりできることを実感しながら、思考力を高めていくねらいがあった。

年度初めに教員がレジュメの例を作成し、それを読みながら質問例や話し合う際のポイント（5W1H をはじめ、視点の持ち方など）を説明した。生徒たちは教員がいなくても決まった時間に図書館に集まり、3 年生のリーダーを中心にグループごとに自治的にゼミを開始する。場所を図書館としたのは開放的で明るい雰囲気が話し合いを活性化させるのではないかという目論見と、話し合いで気になったことについて、すぐに本を借りて調べることができる（読書週間につながる）という理由からだ。司書教諭も非常に意欲的に動いてくれ、15 分ゼミで話題に上がったテーマの特集を図書館で行ってくれたり、生徒に本を推薦してくれたりして、連携して行うことができた。最終的には図書館に SDG s コーナーを設置し、それぞれのゴールに関連する本を展示してくれた。

3 年生にとっては入試の面接や小論文などで、ここで話し合った経験が活かされたようで、大変好評であった。私たち教員から見ても、日を追うごとに着眼点が増え、良質の質問が飛び交うようになり、それに伴い、議論が深まっていったように感じている。たかが 15 分ではあるが、1 年間をかけて取り組むことで、期待以上の効果があったと考えている。

グローバルでの学びを経験して

島貫紀子（島貫康平の母）

3年前の私たち親子はグローバルに無関心でした。しかし、模擬国連を経験したことで、貧困問題や食糧問題について家庭でも議論するようになりました。また、2年生での課題研究では自分の住む町の活性化に着目し、町のPRポイントを一緒に探したり、どうすれば若者が定住する“まちづくり”ができるか真剣に考えたりしました。このような機会から、息子が広い視野で物事を柔軟に考えられるような人間に成長したことを実感しました。

また、フィリピンの貧困家庭にホームステイした際は予期せぬトラブルがありましたが、現地の方々が本当の家族のように対応してくれたため安心することができました。“人類みな兄弟”というように国や言葉が違っても、心は繋がることができると学びました。

このグローバル教育は息子にマッチングし、思考や人間性を育んでくれました。様々な経験を通し自分に自信を持てるようになり、そして、堂々と前を向いて歩いていける人間に成長させてくれたことに感謝しています。

グローカルと出会って

1 年 5 組 完戸 遥々花
保護者 完戸 由希子

娘が高校へ入学して 1 年が経ちました。当初はグローカルも S D G s も何もわからずの状態だったと思います。

グローカルの授業を最初に拝見したのは 4 月の授業参観で、同じグループの先輩方が 1 年生にアドバイスをしながら授業が進み、1 年後 2 年後に我が子も後輩にアドバイスできる存在になるのだろうか？と思ったものです。

課題研究では「子ども食堂」について取り組み、貧困や格差だけではなく、フードロスや難民問題にも興味を持ち始めたのが、何気ない会話からでも良くわかりました。

残念ながら台湾でのグローバルサミットは実現しませんでした。英語が苦手にもかかわらず All English に挑戦し、自宅で夜遅くまで英文のポスター作成をしたり、中止になってしまった 3 月の発表会への参加も希望していた様で、色々な事にチャレンジする姿や模擬国連で大使として交渉している姿に大変成長を感じました。この 1 年間だけでも、これから後輩が入学してきた時にアドバイスができる先輩に少し近づいているのではないのでしょうか。

グローカルを通して

2年5組 高橋 蒼
保護者 高橋 陽子

まず初めに私自身、子を持つ親としてお恥ずかしいですが、“グローカル”という言葉を目にしたのは娘の入学時が初めてでした。

グローカルという言葉は既に、1980年代に造語として発祥し海外戦略のポリシーとしてスタート、今やあらゆる分野で使用されているようですが、私のように全く知らなかった。という親御さんはきっとたくさんいらっしゃるだろうとも想像します。

学校でのグローカルの授業を通して、娘がもくもくと私の気づかないところで研究、調査、などを行っている姿がありました。

そしてその研究発表を聞いたとき、まずは率直に驚きました。

それは我が子だけではなく、全ての子供達の発表のレベルが高いことに。

1つの事に対して掘り下げていくことは、ここまで知識を深めるものなのだな、と改めて実感させられました。現代を生きる人々は特に、大人になって社会生活を始めてしまうと、目の前の生活に必死、日々のニュースに目を向けていても、グローカル授業で学ぶような全ての問題は、広く浅く、知っているぐらい。というのが現状だと思っています。

このように深く学んでいくことを経験したかしらないかでは、人間がきっと違ってくるでしょう。そしてこのような自分たちの生活にも直結するような問題であることに気づく事は、今後の考え方に大いに影響することでしょう。

そして何より、このグローカルという学習をしていく中で、家での会話が非常に増えたように思います。それは何より私たちにとっても嬉しかったことです。

これについてどう思う？ どうしてこうなのかな？ どういう解決策があるかな？

など、非常に大人の意見に興味を持つようになったと感じています。

グローバル化と盛んに言われ続け、結局経済優先の戦略ばかりが大いにされてきましたが、もうそんな時代は終わりを迎えるだろうと感じています。

これからはSDGsはもとより、国や人種関係なしに、人間の命や健康、自然をより大切に、人々が協力し合って助け合う、そんな優しい世界が必要であることを、この高校3年間で自覚してもらえたらと思っています。

そして私達親も、世界の問題については知らない事ばかりです。御校の教育で逆に娘に教えても

らう事が多々あります。その気づきを頂けている事も、私としては感謝しています。

様々なグローバル課題での学習は、家族みんなが相乗効果となって学びあい、話し合い、より家族の関係にもいい影響を及ぼしています。

もっとグローバル授業の時間を必須として、全校生に提供していくべきではないかとも考えます。